彩雲 3号

幻燈一夜

寺本親平

砂丘ともなれば本朝ではまず片方が海と相場が決まっていて、かなたこなたに何々潟としょうする箇所が瘤のように海とは反対側へぶらさがっておりますが、俯瞰した場合に国土の姿は大陸から生命からがらのがれきて大海原のまっただなかでもう追補の手をかわしえただろうかと不安げに前かがみの上体をかしがせたままふりかえっている人の姿にみえなくもありません。能登半島などはいつ大陸からとんでくるロープがまきつけられるかしれたものではありません。いや、じつはもうすでにロープがかかっていて、宙づり状態になって限定されえぬもののあいだではてしなくゆれていきつかえりつしているうちに、物もいえず耳もきこえぬのになにもかも明らかにしってしまっているかのような白々とした暁闇にとりのこされているやもしれません。ただしそのロープのもとの端が特定された場所にゆわえられているとはかぎらず、はじめがおわりをのみこんで偶然がはずんだ必然の暗淵からたれているやも知れません。とにもかくにも物見にもなるが標的にもなるといったぐあいで、古来よりさまざまなものが漂着しひっかかる聖なる杖のようなものともいえましょう。「能登は優しや土までも」などといわれてきましたが、きわどい人倫のほどをうかがわせるさいはての再生をはらんだふきだまりのようにもおもわれるのです。なぜなら刻苦

忍従の気質はあやうい一触即発の殺意をうちにひめ、やさしさはゆだんのならぬものだからです。その半島の付根あたりにあるここ河北潟のふちにたたずみ目をとじれば、わずか半世紀ばかりまえのことながら、のびやかな形状と清麗な水面と蘆原がはるか南東のほうにかがやく白山の嶺とあいまって、鳥たちの鳴き声や羽音がその天地の間をはれやかにふるわせていたころの情景が目蓋のうらにうかんできます。立山にまで連互する峰々のかさなりの奥に白き神々の座である霊峰を遥拝する場として格別のおもむきをそなえたこの潟に、もはや昔日の面影はなく青き水面は渋皮の灰ばんだよどみと化しているありさまなのです。琵琶湖ならば、汽水域をもった瘤湖の宿命でもある埋めたてという憂き目に簡単にはあわなくてすみましょう。一部の水質云々はあっても、内湖といわれる水晶が都からはなれた地でまもられつづけているとつたえききます。それにくらべてここ河北潟は昭和三十八年からはじまった干拓事業によってその三分の二以上をうめたてられ、大手術の瑕跡にてひしゃげております。かつてのうつくしい湖面はいわば妙齢の女人の柔肌にもにて、その皮膚にこそふくよかさや色艶にそうて人の心映えがやどっていたのでした。埋立地は酪農や稲作や野菜作りやレンコン栽培にあてられていて、東西南北にまっすぐのびた農道がみわたすかぎり交叉しております。したたか車ではしるうちその埋めたての規模のおおきさを実感させられるのです。ちなみに河北郡誌なるものに「小舟を浮かべて農業の便を助け……」とあるのは、わずか半世紀まえまで小なる河川を刈りいれた稲穂を満載にして平底舟がいききしていた風景をおもいださせてくれます。また「五十石積未満二隻とその他の小舟七百五隻を有する……」とあるのは、この水郷地帯に点在する真宗の寺や道場のおおさをみても、その水運によってまかなわれた物の豊富さがしのばれてなりません。そして「漁労の利ある……」とあるのは、鮒、鯉、鰌（どじょう）、鰻、鱸（すずき）、蜆（しじみ）など、あまたの魚介にめぐまれておりました。それはみな水の浄化をになう風になびく蘆原がかこっていたものなのです。潟のみなみ側には競馬場と外材貯木場や産廃施設があつまる寂びた工場があり、それらの建造物の外縁をおおうわずかな枯れ蘆が、内灘砂丘をこえてふきくる冬の潮風にかしいで茫々としております。そこにひとりたてば、かつては青々とひろがっていた蘆原がいまはもう奥ゆきのかけらもなく、しょぼしょぼと岸辺をぬう灰色の蘆にはもう永遠に緑はきざしてこないのではとおもういまのじぶんが、やはり枯れ蘆同然に風にそよいでいるのです。そうした景色の一郭に野鳥観察の小屋がポツンとたっています。階段をのぼっていくと、潟をみはるかす目の高さが用意されております。窓際の床に一台の望遠鏡が設置されていました。小屋も望遠鏡も工場の敷地内にあるようにはみえま

せんが、さりとて行政の仕事とすればそまつすぎますが、たて看板の物々しさからすればそのようです。上着の左ポケットのすみのやぶれめからもぐって表地と裏地のあいだのはしっこにへばりついていた百円玉を一個ようやくさぐりあてました。その硬貨が偶然にもほかの硬貨ではなく百円玉だったことで、車まで小銭入れをとりにいくか望遠鏡をのぞかずにひきかえすかせずにすんだことがなんだかうれしくなって、スナップをきかせるかんじで百円玉をほうりこみ、頭をふるわせて味気ない実景にくらいつく気色でのぞきいったのです。波だっている灰色の湖面がせまってきました。拡大された景は虚ろのまくの奥から実景の波もようのぶきみな律動をおくりだしています。生の風音でもなければ波のたつ音でもない、へこんだ寒空に帯電する流動でした。そのような予兆としてのやぶれめの一点から、ツイとたちあがる印となったものがたちまち流体となり、小さな舟の姿になりかわりました。くらんだ灰色の湖面にたつ白波があわいことからしても、ひごろは櫓と棹であやつる平底舟にちいさな船外機をそなえたものとおもわれました。それはおだやかにゆっくりと湖面を北東の方角からこっちへむかっています。とはいってもちちとしてすすまないかんじで、わずかな白波だけが意識にひたひたとはたらきかけてくるけはいなのです。なんどか肉眼でみなおしましたが、拡大された景の形と同等な姿にたちあらわれるまでにはおもいのほか時間がかかりました。その間文明の絡繰りがみせてくれる拡大された景はこちらの意識をも膨張させていき、いわば無時間のただなかへほうりだされていく気さえしてきたのでしたが、やがて過去からわきあがってくる白い靄のなかからいまという一瞬がたちあらわれたかのように、舟のうえの人影が眼にとびこんできました。まっすぐ前方をむいて端座している白髪頭と面立ちが拡大され、ときおり「天籟の湯」でいっしょになる老人だとわかりました。「天籟の湯」は内灘町が内灘大橋の北づめにたてた町営の銭湯なのであります。砂丘の高台にひろがる内灘町は河北潟が日本海へとそそぐ放水路で分断されているため、最新の技術をつかってわたした吊橋なのです。はじめその吊橋の天辺に橋のはしからはしをいききする帆船型の風呂をつくるという破天荒な町長の計画は、当時町議会の猛反対をうけて計画の変更をよぎなくさせられたのですが、町長はときをおかずにいまの場所に吊橋とおなじ高さのタワー展望湯をたてるという案を提出し議会にのませたのでした。そうしてできあがったのが、五角錐の巨大な銀色の天をつく、高さ五十メートルをこえる尖塔だったのです。頂上には舟のかわりにおもいがけぬ形の銭湯が出現し、町民ははるか上空から下界をみおろす至福のいっときにあずかり、安全や技術の面だけではなく経費の点からいっても町長のとっぴな夢物語的発想であったはじ

めの計画は実現可能な領域へとむかったのでした。町長のねらいがはじめから第二の案にあったことはあきらかでした。町がその計画を発表し設計の公募をするや大変な反響があり、全国からさまざまなデザインの応募が殺到したのでした。どこにでもある風呂ではおもしろくないという町長の思惑はありふれたものでしたが、「天籟の湯」という言葉の喚起力にふさわしい一層の高処が町長の頭にあったのかもしれません。最終審査でえらばれたのはひとの目をデザインしたもので、きれ長な拈華微笑をたたえた形状はみる者をして陶然とならしめました。開閉式の天井はまさに目蓋がゆっくりひらいたりとじたりするようで、なん種類かの浴槽は円形にかこわれていて、すべての床面が濃い藍色のすべらない陶板がしきつめられております。人界からながめるにその拈華微笑のありがたさはのぞめません。はるか天空からみおろしてこそその目にであい、宇宙のはてまでみようとしてみひらかされた人間の熱いまなざしともかさなるのでした。天の川がうつくしいころは一階のエレベーターのまえに長蛇の列ができます。年寄りたちは口々に「じょうどを拝みにいかんまいか」とさそいあってのぼっていきます。それはとおく日本海の水平線にしずむ太陽に掌をあわせて普陀落浄土におもいをはせるということなのですが、老いた生身を仏の涙であらってもらえるかと湯にひたって憂き世をひとときわすれさるのでした。なんどかかようほどに「天籟の湯」についてのあらかたの知識をえ、じぶんでもそんな高処の湯に身をひたしてみるという実感をもってみて、これをたてた人間の想像力や意思というものにおもいがいたったのでした。その当の立案者がいま対岸の船着場へ小舟をのりつけようとしている情景があきらかな実景となって、望遠鏡から目をはなしたこちらの視界にせまってきました。元町長は名を下老子（しもおいご）といい、いまはすでに八十も半ばをすぎているはずにもかかわらず、舟から岸にあがる足腰のかろやかなはこびときたら、壮年の躍動感をおもわせました。舟縁を蹴ってひょいと地にたった姿に老いのもたつきや緩慢さはまったくみえません。氏をおくってきたのは、長い黒髪を頭のうしろで毬藻のようにたばねて、紺の作務衣をきた女相撲を彷彿とさせる体格のまだ若そうな女性でした。渇のなかほどを白いひとすじの泡波をたててきていたのがこれだったかとしれ、おたがい言葉のひとつものこしあわずに背をむける老人のうしろ姿と女丈夫は巴御前の面立ちが浮き世ばなれして、かるくエンジンの音をひびかせてもどっていく舟がたちまち木の葉のようにかすんでいくのをみおくったのでした。氏は股をわり腰をじゅうぶんにおとしてから海のほうへむけて両腕をまわすと柏手をうち、それからゆっくりと四股をふんでせりあがり、ひだり手は脇につけみぎ手はまっすぐによこへのばしてまた四股をふみました。氏が血

気さかんだったころ草相撲の横綱をはったであろうことがうかがいしれました。ひだり手は守り、みぎ手は攻めをあらわすという雲竜型の土俵入りは町長だったときの政治姿勢そのままです。まるでそれが「天籟の湯」へあがるときの挨拶であるといわんばかりに一連の動作をすみやかにおえてから一礼し、くの字くの字におれつづく高台までの石段をいちどもやすまずかるがるとのぼっていきました。白くゆれるかたまりが視界からきえてはじめてわれにかえり、はじかれるように身をひるがえして車へもどると、吊橋へむけてハンドルをきっていました。

たとえば卯辰山の望湖台からはるかに日本海や河北潟をながめるというのは、あくまでも眼が水平にならされて俯瞰というイメージとはなりませんが、ここ「天籟の湯」からのぞむ景はいかにも垂直に屹立する感覚を五体のすみずみにまではりめぐらしてくれます。それは鳥になったじぶんをかんじるということです。元町長がはじめに鳥型の浴場をつくろうとしたのには理由があったのだと実感させられるのです。湯槽につかり死の淵にまどろみながら大鷲の背にはこばれて天高く往生する夢をみるのが、この湯につかる作法の一意なのですが、そのことを解しているのはすくなくとも、このわたしと氏いがいにはないとおもっております。高さ五十メートルの偉容は四方どこからのぞんでも圧巻であり、その海がわのほうへはなれたところに一基のおおきな風車がまわっていて、それが一帯の電力をまかなっているものとしれます。ぶきみなくらいしずかに地上からとおざかっていくエレベーターの速度感があるのかないのか実感しがたく、湖面や道路が眼下にしずんでいくようすがすこしずつうす皮をかぶせていく浮遊感覚を同乗した者の肌と肌のあいだにはりめぐらせていくのでした。どのような意味であろうと人は高所の見物をこのむものでしょうが、わが身をはだかにしてこのように不安定な感覚をともなう高所で湯あみするのはふつう抵抗があるものとおもわれますが、それがいがいにも地元の者よりよそからの利用客が圧倒的におおいのです。めずらしいというばかりではすまされないリピーターの数なのです。町の銭湯というものはいこいの場であり、たあいのない世間話でその日の垢をおとすのが通例ですが、ここの浴槽では話し声がまれにしかきこえません。会話がないのです。必要最小限の声のかけあいしかありません。日常からきりはなされた空間に物と化したわが身をただよわせているのかもしれません。そのかわりに総ガラスばりの扇をひろげたような半円形の巨大な窓は、継目が極力めだたない工夫がほどこされていて、うみ風やま風いずれにしても鋭角にあたらず銭湯のまぶたの形の外周をなでまわりかけめぐるのでした。あめやゆきあられにしてもおなじことです。あま音かざ音

またあれくるう波涛などのあらゆる外界の音響はぶあついガラスそのものがほとんど吸収してしまいます。ただおんな風呂とおとこ風呂では話がべつであり、沈黙という時間がその意味あいのまま存在するためしはおんな風呂にはなく、それはかりにあったとしても冗舌の間のつなぎでしかありません。そのことは地上にあっても空中にあっても同等でした。厚い壁でしきられていても、銭湯のうち側にあるおんな風呂からもれきこえてくる髪や体をあらうときの水音や洗面具のはじける音などはかわしあう話し声にまじって潮騒のようにひびいてくるだけなのです。風速五十メートル以上の台風にふきさらされてもビクともせず、また震度にかんしては原子力発電所なみの強度をたもつ構造になっているらしいのです。ただ台風の暴風圏内にはいったときに風呂にはいりにくる粋狂な客はいないので、必然的に臨時休業にはなります。そして蒼穹にむかって設置された太陽光電池が基本的にはしたからふといパイプでくみあげた風呂の湯をわかし予備のボイラーが不足の熱をおぎなって、浴槽をみたすお湯はつねに動脈と静脈によって循環している人体のように機能しているのです。鉄塔を塩害からまもるためにほどこされている特殊素材にかんしても、その調達維持経費は存外なものになっているとおもわれますが、下老子氏が在任中にどれだけの権力と人望があったかが推察できます。はれた夕べに日本海の水平線上にしずんでいこうとしている落日をながめるのは格別の至福となります。とおくにあってすぐそこにみえるのが、この視線の高さの玄妙さであります。地球のまるみをわずかに予感させる水平線にしずしずとしずんでいく太陽から、大海原をさくようにめらめらとゆれなびきながらふとい帯状になって浜辺までせまってくる金波銀波の赤い触手にからめとられそうな心もちになります。そんな一刻にはつねにもまして仮死の淵に身をひたした気になってひとは寡黙になります。「菊を采る　東籬の下」といまこの夕暮をしばしまえにいっとき余人をはいして口ずさみ、たまたま白い頭と禿の頭がふたつ、海ではなく山のほうをむいてならんでいます。「悠然として南山を見る」やや間があって、氏の声がつながりました。まだ鳥が山にかえるにははやいのですが、鳥かげはおのずから湖面にうつっているようなものです。それ以上はかたらず、言は不要ということになるのでした。そのごの深くしずかな沈黙は湖面のさざ波が、そこにうつる紅葉の色を刻いっこくと樹上の葉のいろどりにてりかえしうつしかえして深めていくようすとおなじでした。「あんたさんは、なんやて『天籟の湯』なんぞというきどった名前をつけたんや、とおもうとりまさらんかいの」これまで町民らしい客とのみじかい言葉のやりとりはあっても、会話らしいものをきいたことがなかった氏から、ながい静寂のあとにはじめて言葉をかけられついで

にこちらの心のうちまでよまれていたのでした。それも山ぎわの弥勒の在所からやってきて、氏との接点がまったくない身としては、「天籟の湯」にたいする感覚への勝手なおもいこみだけで相手とつながっているとかんじていただけだったのですが、ふたりきりになってつい陶淵明の詩の一節を口ずさんだのをきっかけに、ひたひたとうちよせてくるえもいわれぬ心地よさが湯の表面をおおうのでした。「町長としての矜持でしょうか」「じぶんの銭でたてたがなら、当然つけたい名前もあったがやて」「どういう名前ですか」「ききたいかいのォ」「はい」「あんたさんなら、きっと気にいるとおもうが、ほの名を『生殺しの湯』というがや」こみあげてくる笑いをこらえながら、わが意をえたりの心境で両の掌で湯をたぐりよせにぎりしめて登をふみかためていました。「地獄の入口というわけですね」顔をむけてニンマリほほえんだ顔がそれまでふたりのあいだにあった距離を急速にちぢめていくのが実感されました。

湖天一色、水気膚を透すばかりの初秋、みぎからひだりへと頭をめぐらせば、能登へむかう海岸線をのぞんで、宝達山にはじまり石動山から二上山を霞のかなたにおがみ、礪波平野は八乙女山系のてまえに医王山をはいして立山から白山へとつらなる奥ふかく高い山嶺がわずかにきえのこる雪形を胚胎して悠然と遠景をひろげております。金沢の街とここ内灘や金石の地が往時から船荷のいききでつながっていたのは、犀川や浅野川やいくすじかの主要な用水のながれをみるにあきらかなのですが、かならずしもいまの世にあって内灘が金石のように金沢市に編入されるべきではないのがなんとなくわかる気がいたします。元町長はたび重なる合併の要請をことごとくはねつけたのでした。みぎは千田のあたり田中の方角に「ダイダラ坊」とか「ダダ坊」とかいわれた巨漢のとほうもない足跡があるらしいのですが、それは能登や河北潟や加賀はいうにおよばず日本各所にあって巨人伝説としてのこっているそうです。ちいさいころは「データラボッチ」といういいかたで、あたかも実在の大男としてイメージしていたのをおもいだします。一向一揆の首謀的大坊主をシンボライズした名称かもしれないなどとつゆしらず、ただお伽草子にでてくる愛敬のあるひとつ目の山坊主のようにおもって口にしていたのでしょう。こうしてあらためてそのあたりをながめやると、この塔がノッシノッシと一本足であるいていきそうで、じぶんが「データラボッチ」になったほどの豪気になってくるのが、奇怪にして一景の実なるをかんじるのでした。「ドームがひらいて、夜空の星らちをながめとると、あの星と星のあいだの暗い闇の奥の奥にわしらのかえるべき来世ちゅうもんがあるとおもえてくるがや。不生不滅の真空の炎熱地獄こそ天の渦の底にあるわがふるさと」「不可視のニュートリノの粒子があめあられとふるほどに、ひとの意識はその無限のかなたの渦から放射されて、この世の鏡に乱反射し偏在する朝露のかがやき」「ほうや、三六〇度、絶大なる意志をもったプロジェクターが照射しうつしだしとる。あるものもないものもな」「たんなる無ということではなく、亡くなる意識のきえていくさきの話ですね」「いい調子やが、あがるかのォ」そうしてふたりきりで瓜か南瓜のように首から上だけ出してつかっていたのもさしてながいことではなかったとおもわれますが、ザワついた濁声がして四、五人の老人たちがはいってきたのを機に、位相のすきまにほうりなげられていた不可思議なひとときが霧散したのでした。おもいのほかまだ肉がのこっている者もいれば、枯れ枝にかわいた蓑虫の皮がぶらさがっているふうな体躯の者もおりましたが、だれもが元町長の存在を確認したしゅんかん、それぞれしずかにかけ湯をしバラバラになって浴槽のへりからしずみこんで、海のかなた山のこなたへと眼をはなちました。氏がしわぶきひとつたてずに、スイと身をさしあげそとの脱衣所のほうへ移動していくのを、あわててあとを追っていったのでした。氏のまっかにそまった体がしぶいうす茶の作務衣におおわれるやいなや、みるまに草履をひっかけてエレベーターのほうへすり足状態でむかっていきました。こちらは下着をつけるのももどかしく、ズボンをはくなりシャツも上着も鷲づかみにしてあとを追ったのでした。数人の男女がでて空になったくだりのエレベーターへまたしてもふたりだけでのりこむことになり、天蓋から膝あたりまで風呂とおなじガラスになっていて四方がぐるりとみわたせるのは、のぼりとはちがってくだりは臓腑がよじれるくらいの酩酊感があります。いつしか夕暮せまるころとなっていて、上空に茜のてりはえが万華鏡となっていのこり、渇へ眼をやれば、どうやらサナギかミミズの形して、あわい紫の暈をまとった白銀の円屋根が渇のふちの工場群の一角に姿をみせていました。はじめて眼にする建物でした。急に地面からふくらみわいたとでもいえばいいのか、そのほのかな茜をうつす輝きぐあいがあまりにもあざやかなのが周囲のくすんだ工場のふんいきからして異様なのでした。「あんなまぶしい代物がいつできたんでしょうかね。なんだかぶきみですが……」その言葉に氏はうっすらと笑みをうかべてから、やおらかたりはじめました。「あァ、あれか。ありゃ、鳳凰がうみおといた卵やて。きんのの夜さり、どえらいでかい雷の音がしとったやろ。あんとき空からふってきたがや。あんまり重とうて、あんながに半分うまってしもうたというわけやて」氏のはずんでたのしそうな声にのって、こちらもしぜんにそのけはいのままに話をあずかっているのでした。どちらにしても宙天の話になってしまうのでした。「さもありなんですな。それでなかに

はどんなにきれいなお姫さまがおられるがやろか」「ほうか、やっぱり、あこには乙姫さまかかぐや姫しかおらんかのォ」氏は精悍な赤ら顔にニヤニヤうす笑いをうかべながらこちらの顔色をうかがうのでした。地上におりたつと、氏はすたすたと斜面の階段をくだっていきました。岸にはすでにかのおんな船頭が舟をよせていて、こちらにむかって一礼するのがみえました。「姫にあいにこさっしゃいの。中秋の名月のよさり、鬘物をやりまっさかいに……」氏の太いうたうような声がしたから風にのってとどいてきました。なぜかかえりの舟は櫓をあやつり、ゆるゆると暗みはじめた湖面をはいながらひっそりと遠ざかっていき、舟影がちいさくなるにつれて櫓のひびく音がたちあがって耳についてなかなかきえようとしませんでした。

まずはあの不可解なサナギともミミズともしれぬ物の実態が気になって、月がみちるまでまつことなどどうしてもできませんでした。さりとてすぐにたしかめにいくのも逡巡されて、月がみちていくのをジリジリしたおもいでまちこがれておりましたが、望月のてまえわずかにかけた月の夜、辛抱たまらずに家をでました。なにやら昔の男よろしく夜ばいにいく心もちになって、ひえびえとしてきた夜気に眼鏡をくもらすばかりにほてっておりました。工場がたちならぶ陽があるうちの喧騒は景気のいい活気とはちがうけれど、産廃業種の熾火が地なりするばかりにくすぶっていて、でいりするトラックのタイヤのきしみにもずぶといはずみがかんじられるのがおもしろかったりするのですが、こんなよふけともなれば、どこかでボイラーかなにかの電源がジンジンジンと静謐をあおっているのがこの一場の景をうきたたせている月あかりのいたずらにもおもえてくるのでした。くだんの円い筒形の物体にちかよってみあげてみると、それは造られた物体というよりは生きものといったかんじの代物でした。より正確に描写するならば、巨大なミミズが頭部だけ土中からはいだしたようすで、土くさい下賤ななごりをわずかにとどめながらも表皮の全体が月の光にはえて絹のてりつやをはなち、なかにいるものの意思がそのままにじみでている気がします。とお目にはサナギでしたが、こうして近場であおげば、あきらかにミミズのオブジェとしかみえませんでした。河北潟の水郷の一村である八田の在には「八田みみず」としょうして、なぜかその地にだけ全長四乃至五十センチにたっする長大なミミズが生息しています。八田町史によれば、原産は亜熱帯とのことで前頭部のはばひろく、ふとさは大人の小指ほどもあって背面あお黒く、胃袋を六乃至九個を有して生殖突起もおおいとのことです。幼いころは灰白色の体の両端がうす紅だそうです。鰻の餌として田圃の畦ぶちなどからぬきとられ、潟がうめたてられるいぜんは一日一万匹を

数日間にわたってとったとのことです。その両端をもってひっぱるとゴムのようにのびるそうです。元町長はこの魁偉で貴重なミミズの幼い姿をイメージしてつくったものかと推察されます。その全体の厚みや長大さは目をみはるばかりの偉容で、まわりのどの建物もとおくおよばない圧倒的な存在感がありました。当節の企業はおもいもよらぬ商品開発をしているケースがあるそうですから、元町長もひょっとしたら九つもある胃袋の部屋でとんでもない果物か野菜を栽培しているのかもしれません。ずんと近づいてしげしげとその肌あいをながめふれながら一めぐりしてみましたが、うす灰色の外壁はやはり天然の風あいがあり息づいていて、指の腹にあたった感触は生きているものの手ざわりがありました。もとの場所へもどると、ずんぐりとした人影がたたずんでいて、それがだれなのかすぐにわかりました。あの舟をあやつっていた大女がふかぶかと一礼してから、「おいでなされませ」とひくいけれど澄んだ声音でむかえてくれました。それはころあいをみはからっていて、こちらの足音にこたえてあらわれたというかんじでした。大女がひだり手をあてるだけでうす皮がはがれるように一郭がたわんで裂けめができ、大女がすべりこみました。いささかひるんでいると、なかから肉づきのいい腕からのびた、ふとくてしなやかな五指が波うってよびよせるのでした。いやもおうもなくからめとられてなかへひっぱりこまれていくうちに、ぶきみなミミズの腹中へのまれていく心もちになっておりました。いっとき意識がうすれてのちにふわっと気がもどった眼前にひろがっていたのはかすかにそよぐ蘆のけはいでした。それはじつになつかしい景色の展開でした。かつてこの潟のふちに迷路となって川すじをかくしもっていた蘆原がいわば無時間の景のなかですかし画像となってういているようでした。内壁のほのかに緋の色あいをにじませた紫紺の肉襞をあからめて、望月になりのぼらんばかりのよふけの月が天にあるのがわかりました。蘆のむらはさきがみえないほどのびていて、はばも七、八十メートルはあろうかというひろさでした。そして水のながれのかわりにいくすじにもおれまがって蘆原ふかくいりくんでいる板の足場があるようでした。湖底にむけてゆるやかなスロープをなして蘆むらがしずんでいます。そしておもったとおりしたのほうから九つの繭玉のような部屋らしいものがうえまでつながっていました。それでミミズのオブジェであることがうち側からも確認され、天籟の湯とこの生きものめいたドーム状の物体の内部空間はいっついの物なのだと確信させられました。「さァ」とうながされてようやくひとがすれちがいできるはばの踏板をたどって蘆原のなかへとさそわれていきました。地上にあがったところには三つの部屋がありました。天井は高くそびえたつ茎と葉波のかさなりにそがれ、山かげの木の間

がくれに東雲のあけやらぬ空をあおぐ景色で、中学生のころの潟あそびの時間につつまれている気もちになっていきました。茎間をぬってそよぐ風に葉ずれのひびきがつらなり、実際に蘆原をわけいってきいたときの大葦切の啼き声やカイツブリやバンの水中へもぐるかすかな水音がきこえてきそうな気がするのか、本当にきこえてきているのかさだかではないが、そういう臨場感さえただよっていて、足場の踏板もやがて水面にうかんでわずかに水にひたっていくのでした。蘆むらのいちばんうえのあたりのまるい淵のなかに白い絹の蚊帳をつるしたふぜいの繭のような部屋がありました。内部の壁はいままさにカイコが糸をはいたばかりにみえるはかなさにてりはえて痛々しいかんじさえいたしました。大女はその部屋の奥の膜をまくりあげると鷹揚に顎でしゃくって、「ついてこい」という身ぶりでさきにはっていきました。そこにはあわいピンクのにじんだ白銀がシーンシーンとなってうち側をどこまでもおしひろげ遠ざけようとしているのでした。そんな空間の中央に何色ものあわい色彩がほどこされた霞模様の布団から、膚がぶきみなほどすけて眼球が灰白色の暈になった女の顔がでていました。これほど実体がなくけはいだけで造作されている顔をみたことがありませんでした。それは絵筆にあずけられて壁面にうつされたものともみえました。床はすりガラスのぶ厚い物がしかれていて、ベッドの両脇には三角や四角や円や楕円や菱形や、あらゆる形の足をふみぬかない程度の孔がいくつもうがたれていました。大女は無造作に布団をめくると、ベッド上の女の背にみぎ手をさしこんでおこしました。みればその女の首からしたが包帯でグルグルまきにされているではありませんか。上半身をおこした女の横顔にサッと血の気がさして、いかにも若い娘の頭部が壁の絵からぬけでたかにみえました。ながい髪は亜麻色にかがやいて瞳の色が生きた茶黒にへんじた娘を息をつまらせてみいりました。「この娘は親の因果かその親の親の因果かそのまた親の親の親の因果かしらねどもこの世に何人ともおわさぬ難病を体中にせおうたあわれな身のうえじゃ愛っしゃなァ愛っしゃのォ」大女がうたってきかせてくれました。それで包帯の意味がまずはわかりました。「くびからうえに包帯がまかれていないのはどうしてなのかいなァ」といぶかしげに疑いぶかいものいいをしてみれば、娘の顔が湖面のさざなみにに皺を波うたせてそれの余波が髪をそよがせました。口唇はなにかいいたそうにしながらもただブルブルとふるえていました。「この娘の体は首からうえとしたにわかれていてうえの顔と頭はしたの手足やら胸やら腹やらからどことといわずに慕いつづけてホウヤレホ疾のいわれをおとのうてみればお天道さまから見はなされ闇夜の淵にしずんでは月の光をたよりに顔からうえはきえてはあらわれ白んで暗んでいづれの世の像ともみ

えやらず、むかしむかしのならわしに、へその緒つちに埋めたとい、はじめにほのうえとおったものを嫌うとか、みみず嫌いのこの娘、いまはみみずにまもられて」大女の言によれば、娘の首からしたのあらゆる部位が陽の光のおよぶいかなる条件下でも皮膚の表層面がただれて命の危険にさらされるのだということでした。なぜだか奇妙なことに首からうえだけはその疾厄をまぬがれているのだそうです。そのかわり皮膚や髪は脱色されて透明度をましてうちとそとをわかつ皮膜の細胞本来の役目をはたさなくなっているらしいのです。ために脳の神経細胞のはたらきまで変容をきたしているふうなのです。娘はときに人形となりときにかすかにひとの頭と顔になり、腐敗寸前の人体となるというのでした。下老子氏が「八田みみず」のオブジェにこだわった意味がわかりました。ふびんな娘をまもってくれる強大な生命力をもった地中にすむ八田ミミズこそ、はじめに娘のへその緒のうえをとおったものだったからです。嫌うは好むのはじめなり、と申します。「この娘はいかなる前世のむくいにてか話す言葉をうしのうてかわりに詩ならんとするものをかきつけここの壁にかきなぐりおるとてもかくあとからかかれたる言の葉はきえうせて顔は水鏡にうつったよう髪の毛は水藻のゆれるよう言の葉はよせてはかえす波にはこばれる水死人の甲斐なきにて」大女のだんだんに祭文語りか説教節の語りめいたしゃべり口調は、包帯娘の烏有に帰すべき詩文の一音一韻が倒立してふるびた韻音と化して大女の口腔からはっせられているかの印象をあたえるのでした。かの娘は指一本いっぽんにまで丁寧に白布がまかれた掌でふとい マジックペンをにぎってたたきつけるようにはげしく言葉をうつそうとこころみます。〈外皮の∞♂℃……皺の嘆きに！……∴♀¥…波紋の及ばぬ所……〆×÷≠£…浮草の水鳥の褥燃ゆ…≦&@☆●…内皮より…◎◆捲れ至れる……喉の痛みし……★＊#…腸の捻れの空炒りが…△■　#¢……膣壁と直腸の居直り…@§※〒＝◇……恥丘に燻る怨念の紫煙立つ〉こうしておもわずちいさく声にだしてつぶやいてみても、その一句一句のあいだにある娘が本当にいいあらわそうとしている内面のさけびはとうていよみとれないはやさできえて了っているのでした。ただの心象風景めいた現象を記した言葉だけがまたたきするあいだいのこっていてくれるのです。おそらくコマーシャルの映像のすきまへうめこまれ、みる者の意識下にやきつけるいっしゅんの無作為をよそおった画像にいています。人間の悪意と神のたわむれのちがいこそあれ、うちがそとのねじれかえりのあくなき反転はこの娘の無限地獄というものなのかもしれません。大女はいっときペンをおどらせていた娘をとりおさえ、ゆっくりと足のさきから包帯をはがしだしました。それはみようによっては、生きた獲物の皮をはぐようでもあり、逆さに

ひきはぐようでもありました。娘は逆らいえぬままされるにまかせてその身をくるりくるりとみぎにひだりに包帯の意志によっておどりまわされるのでした。いっさいの白い布がはがされたとき、目のまえに上気してほんのりと赤みをおびた顔面と漆黒の髪の頭部へと、それまでの人形の面立ちから一変していました。そして手足胴体がすっ裸の状態でベッドのうえにたたされていて、その体の表皮のすみずみにいたるまで直視するにたえないほどむごたらしい灰白色にひからびた魚の鱗状のものがおおいつくしているのです。うら若い乙女のかがやきはちきれているはずの肉体がむざんにもまっぷたつにひきさかれている図でした。目にしたとたんこちらの皮膚も逆だちひびわれてピシピシと音のたつのがきこえそうでした。本来言葉でもって心のたけをしたためるということは生身の生そのものを扼殺することにひとしいのですが、この娘のばあいはかくこととこの世にふみとどまっていることとの関係はそう単純なものではないようです。「さァ、おトトたちの食事タイムといたしましょうぞ」と、大女の口から意味のわからぬ号令めいた言葉がはっせられ、おおきな両の掌がパンパンうちならされました。するとその残響音は内部にいたくこだまし、雷鳴とどろく暁の潟の景となって蘆の葉のざわめきとうち壁のひよる反射光が耳目をかきみだします。河北潟一帯は落雷のおおいところで雷の研究などがよくなされているときいていますが、この内部でもおなじ現象がおこるのです。音のきえやらぬ間にさまざまな形をした穴の水面がしわぶき波だちはじめました。円筒形のオブジェは生きてあるもののごとくに湖の水と魚をいちばんうえの部屋のしたまですいあげていました。大女はたっている娘の腰のあたりをみぎ手でささえながら、ひだり手の指をさもたのしそうにあやつって娘の全身をおおっているかわいた瘡を一枚ずつはがしだしました。そっとはがしたりいっきにひきはがしたり、大女のやりかたは心くばりがあるようでいながらも、じつはいかにも残忍な快感めいた指づかいになっているのでした。娘はそのたびに身をよじり髪が逆だち顔面に苦悶の皺をひきつらせるのです。はがされた瘡はつぎつぎと穴のなかへほうりこまれていきます。穴をうめてしまうほどのきみわるい魚の口吻が、さきをきそってその瘡にむらがるのでした。それは見世物の様相をていしていました。きっとかつてどこかの小屋掛興行にあった出し物のひとつかとおもわれます。瘡がめくれた痕は毛細血管がすけてみえるピンク色の皮膚がプルプルプルうちふるえているのです。うまれたての赤ん坊の皮膚のようにこの世の空気にふれてうちふるえている色ではないのがいたましくはかなくみえました。そして娘のちいさな口のはしにくぼみができるごとに、その唇から声なき言葉がはっせられているのがわかるのです。あまりにせつなげに息のほそりがもれているがために、発語されるべき言葉が膚と肉のうすい皮膜から送信されてきているのはたしかなことで「痛いがや、寒いがよ」とこぼれくる感覚がすべてのようでした。表面上にないものなどなにひとつありませんでした。ふかくひらけば、そこには人形の殻があるにちがいないのです。脱殻こそ内実の総称なのでしょう。やがて大女はこちらに顔をむけて「おまえさまも手つだいなされよ」と目で指図してきました。おさないころに蛙の皮をベロリンとむいたときの、あのヒクヒクする感触がおもいだされ、いまはすでにない残忍さにあおられるすべもなく尻ごみしていると、大女はいまいちど顎をしゃくってうながし「さァ、さいごのお乳の瘡をはがしてこの軟膏をおぬりあそばせよ」というのでした。おいつめられ、乳首だけのこして表面をおおっている瘡の一枚いちまいを片目のはしでぬすみみしながらめくっていくしかありませんでした。人形はおそろしいのです。いたましいものをのみこんでいるのです。赤むくれの表皮の下層にかがやき脈うってながれる緑青の葉脈が乳房一面をはしっています。その中心で乳首は天へつきたっていました。すべての瘡をはがされた娘は身もだえしかろうじてたっていました。大女が私の耳もとで「さアさアさア」とせかしました。いえ、そそのかしました。意をけっして娘のそばにたち、娘の体によりそい、かたい乳首をひだり手の親指と中指でつまみあげ、しぼりだした透明な軟膏を恐る恐るみぎ手の五指の腹でもって祈りをこめてひだりまわりになでぬりました。皮をむかれた熟柿のような乳房は一ぬりなでまわされるたびにみごとな肌色へとつくりなおされていきました。私はその再生のさまをみながら薬をぬりこめすりこむうちに、じぶんがこの娘をうみだしているのだとおもえてきました。うちなる場所から人形の声がきこえてきます。顔面から首すじへ肩から腕へさらに手へとぬりさすり、胸から腹へ背から腰へさらに臀部へと、すらりとのびた腿から脹脛へさらに足の指へとすすみました。そしてさいごにそよぐ栗色の草むらをかきあげ、そこにかくれていた沼の緋色の襞へと指をさしいれぬりこめました。沼のうち壁はそとへそとへとめくりかえろうと波うちくねりながらまたそとへつきたとうとしました。「この娘はこうして十五夜の夜の月によみがえりゆく一夜のあだばな」と大女はうたうのでした。ハッとわれにかえれば、眼前には虹の色めくらめくすっ裸の若い女体があらばこそ、驚嘆はいっしゅんにして狂喜へとかわり、こみあげる女体再生の実感は幻と化し、そこにはひとりのしなやかな肉体をゆらめかせた青年とおぼしき像が屹立しているかにみえたではありませんか。大葦切のせわしい啼声がひびきわたりました。

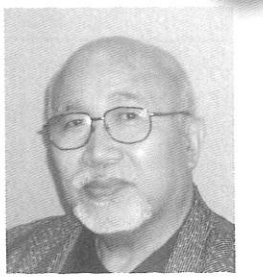
ときは月明の秋の夜。ところは河北潟を江口のほとりに

みたてて。下老子こそワキなる西行上人。川丈の身を舟ならぬミミズの筒をふたつにさいた花筏にうかべて。水鏡青炎実相無漏の大湖に棹さす舟あそび、月光は往古のかがやきにみち、長筒よりもれきたる蘆のむら潟のなかほどにつどいし。にわかに五塵六欲の風ふかば蘆原そよぎハリリハリリといたむは波の立居に真如のさざなみ澄みし月魄ま白き象のむかえよりきたる水鶏の喧騒と水死人の聾唖をよそおう雷鳴のかわるがわるになりしずむ深更いよいよ第一場の序の段あらわれるときをこそまちわびて。かの長筒は湖上を夜陰のうちにすべるか湖底をはうかしてうつされ、潟の北東のまだ水清む岸辺の蘆むらを背に湖面中央にたちひらかれ、夢幻能「江口」の舞台となり中天の月光をむらむらとあつめております。たてにさかれて左右へひらかれた長筒はみずからが一叢ひとむらはきだし扇の形にあいた舞台を半円の蘆壁でつつみこんで、とおくの砂丘へむけて小波をたてている湖面へとせりだしています。大女の櫓をきしませる音もしずまり、たったひとりの観能の客として舟上に身をおき、むかしをしのぶ旅僧の心情を水面にうかべてころあいのよろしきをまつうちに、潟ぶちの蘆原白じろとして「ほれ、あたいは江口の君、あんたさんは西行法師、あめにふられて一夜の宿をことわられ、さァ、なんとうたわしたがや、よみあげてみさっしま、さァ、早うらとはようらと」大女はすでにふたりしてたわむれにも序の段の前段をえんじているのだとさとしたのかもしれません。こんやの能が場所柄からしても本三番目屈指の名作「江口」であると十分に予測がついていたことなので、亡父遺愛の謡本をひもといて何度もよみかえしてまいりました。ために西行の歌とそれへの返歌だけはしかと頭にはいっておりました。江口の君が文芸の才ゆたかな象徴的存在であったとしても、返歌も西行の虚構のうちといえなくはないのでしょう。『世の中を厭ふまでこそかたからめ　仮の宿りを惜しむ君かな』と口にした歌はおもわずしらずしぜんな節がついておりました。『世を厭う人とし聞けば仮の宿に心留むなと思ふばかりぞ』大女の声がそれまでとはうってかわって、あまやかな遊女の長の声となり、にわかに西行の歌にサッとばかりについたのでした。すべては月明かりのみにての演能ということらしく、薪の篝火が用意されているようすはなくて湖面をてらす月光が舞台となった長筒の壁をてりかえし、それがトレーシングペーパーのおもむきをも呈してやがてそのかげにひとの動くさまがうつしだされましたが、それも影絵となってしずまりました。囃子方とおもわれます。高空にはまった月からそそぐ光は夜がふけるとともに冷えびえとさえ、ひとときの無風空白ののち、背後に物のけはいがいたしました。つぎのしゅんかんじぶんがのっている舟がふたつにさけたのか、それともべつの舟が音もなくよりそってきたのか見当がつきませな

んだが、みぎ手にも舟あり、それには着附は無地熨斗目なる従僧ふたりのりおりました。それまでの空白を水平にさくように同吟にてふたり「月は昔の友なれば、月は昔の友なれば世の外いづくならまし」とうたう間に間に笛小鼓大革の囃子がわかちがたき今昔の月と友をわかたんと夜気をさいて射し映え集散する物の容をつなぎとめおり、うすい乳白色のスクリーンから風にあおられていでたる者、「これは都方より出でたる僧にて候。われ未だ北國を見ず候程に、ただ今思い立ち北國行脚と志し候」と西國を北國に語りかえれば、いつしか白銀のてりはえる舞台はそこだけこうこうとライトがあたっているほどにうきたち、一見して下老子とわかる旅僧はところの者と相たいし、「水郷の人の渡り候か」と序の段のつづきにはいるところでありました。ワキとして「江口の在所」を「水郷」のといいかえてこちらへといかけたは、アヒなるをもって舞台にあがれとのさそいにほかならず、いまは大女が里女にへんじたのに手まねかれ、下老子と対面しおりました。「天籟の湯」でたいした元町長の恰幅はうすれ、角帽子をつけた水衣の出立ちをささえるすり足はあの老いをかんじさせぬあるきっぷりがえんずる脚力とはどこかちごうておりました。姿あれど容なし、という気色なのでした。いまどきの水郷の者にはちがいないが、アヒなる「所の者」となって旅僧を江口の君の旧跡へといざなうに、里女の唇のうごくにまかせて台詞をなぞりかたり、古昔の河北潟の半農半漁の男へと夢幻のひとときをかわりおりました。一場の観客から舞台の者となり、時空をまたいだ感覚をえてから大女とともに舟にもどれば、目と耳の感応が増幅され震幅いたしました。シテなる里女があらわれてワキなる旅僧と問答におよぶ破の段にいたって、里女の小面は娘々したふぜいのままにシテとしてかたり、老いて足腰のなえた下老子翁となってうけこたえ、深更はかわたれどきにいれかわり、むかしはるかに西行が江口の君とかわした宿借る浮き世の理に『草の陰野の露の世を、厭うまでこそ難からめ、仮の宿りを惜しむとの、その言の葉も恥ずかしければ』と心のうちをあかしたのは、一夜かぎりにほかならぬ川あそびするはかなさに『惜しむこそ惜しまぬ仮の宿なるに』と地のうたうにつづいて、第一場はやがて急の段へとすすんでいきました。墨うっすらとはきながした浮塵子の靄のなか、旅僧のおとずれを『宿一樹下、汲一河流、皆是先世結縁』というにあずかり、みずからを江口の君の幽霊と名のって、あとは地の声だけがひびきのこりつつしずまっていくのでした。囃子方も地謡の面々もすべてが結界の膜となったおぼろな壁のむこうにあって、実態なき像にみえてじつは生々しい気色をはらんで、そのじついともはかない陰影にゆがみつつ、声と音だけはこれでもかこれでもかと波間にしずんだ亡霊たちの悲痛なさけびをともなってはりさけるので

した。それは第二場にいたってひときわはげしい展開をみせていくのでした。すでに月は中天にありました。ワキの待謡にはじまり、地謡が「月澄み渡る河水に、遊女の謡う舟遊び、月に見えたる不思議さよ、月に見えたる不思議さよ」といまの月にむかしの月をよびかけて、序の段の了りとなりました。作物の屋形船など不要でした。波にうかべた舞台そのものが時空をわたる船となり、いままさに一聲で湖面をこぎわたる舟にのって後ジテたるかの若き姿が素顔で、まっ白にかがやくばかりの頬に笑みをたたえ、ツレ遊女ふたりともない、うちひとりに棹ささせ、おもむろに破の前段へと舞台はうつってまいります。かの者は増女の面をつけずにあらわれますが、その素面はもとの面にしてもとの面にあらず瘡面がひそんでおります。ただ身は鬘帯、擦箔、唐織、かざす扇もあでやかに、「江口の君こそ尊けれ、川逍遥のちぎりとて、あまたの男とまじわりぬ、この身にくらべてうらやまし、湖中の竜にかこわれて、男もしらぬとらわれの、花も紅葉もなかりけり、空ゆく雲もふる雪も、枕をかわすひとありて、愛別離苦の煩悩が、むなしきときのうつろいを、いろどりてこそ憂き世なれ」と棹の歌にかえてうたうのでした。ここに幽霊となって時空をこえる江口の君はおりません。ただいまこのときのふりむきざまの過去をまといひと足さきのいままだこぬ明日をかこつ憂いのみあって、本来のしみじみと心にのこる川逍遥の風韻にとぼしい観劇のようにみえました。となれば破のクセの段はうかれ女のなげき節、罪障の大波小波にあらわれて、身は川竹のあけくれや、せめてこよいの月だのみ、冥途とやらの黄泉の坂、てらしたまえとうたうなり。このときとつぜんの雷光がまたたきはしるように、天地がかがやきました。目くるめくあかるさが湖面をてらし、舞台に光のたばをなげかけてきたのでした。左右をうかがいうしろをふりかえれば、いつの間にか、おびただしい数の松明をともした舟が湖面をおおいつくしていました。それがかつてこの潟を往来した七百五隻の荷役舟や漁舟であろうことはうたがいようのないものでした。舟上の人影はくっきりと又おぼろげに、顔さえさまざまではありましたが、ここにひとりの観能から霊のかげにかこまれた客席となってあらたな夢幻能がはじまろうとしておりました。地謡が独特の節まわしで「歌へや歌へうたかたの……」とうたいつつ、かの若者の素顔はいつしか増女の面となっており、晦冥の淵に沈淪する憂き身をうたいかわしていきます。小鼓の音は蘆の葉茎をそよがせ、大革の鋭いひびきは「天籟の湯」にこだまして、笛は幻燈の篝火をあおりゆらめかせました。やがて破の後段、「おもしろや」と序の舞をいまに往古のありさまをかえしてうたいまう姿のあでやかさ、むかしもいまもあらばこそ天とどろき地なりて、正覚し白象にのって昇天するかとおもいきや、面をかえすそのさまにあるいはおとこの面影あるいはおんなの面影をうつし、はては白象ならぬ背青黒き土の竜にとりこまれてきえうせたのでした。地をつらぬきやぶって天にのぼらんとするいきおいにもかんじられました。あまたの舟さりすべての登場人物きえはてても、哀感にみちたクセ舞の謡、囃子方の調べが海なりのかなた、耳にのこってしばしきえやらず。月冴え空澄み、湖面しずまりて蘆かすかにそよぐ。配所にて世阿弥のみた月が「維摩不二法門」の考案に法るこの三番目物で、陽の情けをあびていつの日にか蘇生する下老子氏の娘をてらしてくれるのをのぞみつつ、大女のこぐ舟にゆられて西にかたぶくいまの月をみたことでありますよ。

「彩雲」3号より転載



寺本親平

てらもと　しんぺい

本名／寺本信一

1943年　金沢市生まれ

62　石川県立金沢桜丘高等学校卒業

65　文芸誌「文学DARA」に参加

74　文芸誌「渤海」創刊時の事務局長を務める

92　「遠州豆本の会」会員となる

97　文芸誌「荒土」に参加

2005　「遠州豆本別冊短編集10号」に掲載された『卯辰』が雑誌「文學界」で2005年上半期同人雑誌優秀作に選ばれ「文學界」6月号に転載される

『卯辰』が泉鏡花記念金沢市民文学賞を受賞

同年　文藝同人誌「彩雲」に編集同人として参加

著書「短か夜」「フェイドアウト」

実力者ぞろいの情熱本

彩雲

「彩雲」と私

静岡県

文藝同人誌の編集・発行人として、その同人の作品が受賞することは編集者冥利に尽きます。後述しますが、かつて私が文芸誌「荒土（あれつち）」を発行していた頃「文學界」誌の同人雑誌評の中で取り上げられる度に歓声を上げ、書き手と共に喜びを分かち合ったものです。丁度わが子が運動会で一等賞に輝くとか、描いた水彩画が校内に飾られた時の喜びに似ています。いや、運命共同体の意識の中で、老いた身に鞭打って文藝誌「彩雲」の表紙絵、巻頭詩、目次のカットなどのレイアウト等を一人で編集している身ともなれば、我が事以上の情感にひたりその嬉しさを会う人ごとに伝えたくなります。

寺本さんと私との出会いは、芥川賞受賞作家の吉田知子氏が主宰する「遠州豆本の会」でした。寺本さんは平成四年の入会で私は一年遅い平成五年でした。豆本は一年に四回発行する。そのため同人が吉田邸に集い先生の指導のもと、三か月毎に原稿用紙三枚の校正をするのですが、寺本さんは金沢から浜松へ通うことが無理で出席しなかったらしい。だから私と会えるのは年に一回開催される「豆本祭り」の時だけでした。寺本さんは私と会っても軽く頭を下げるだけで、自分から話し掛けてはこなかった。何時も片隅で大きな体を作務衣に包み何事にも動じないという眼差しで立っている姿は結構目立つ存在でした。一日中「豆本祭り」で同じ会場にいても私と一言も会話も無く別れたのは、今考えてみると寺本さんの雄姿が私には近づき難い存在だったのかもしれません。

「遠州豆本の会」に入会してから二年目の私に、吉田知子先生から力試しに「浜松市民文芸」に出してみたらと薦められた。試みに投稿すると三年連続で受賞しました。その時、先生が「私も寄稿するからこの機会に地方と中央の懸け橋になる文芸誌を作るのね」と言われ、名前を「荒土」と命名して薦められた。私は自分の未熟さも顧みず感激の余り自費で「荒土」を立ち上げることにしました。この話を知った寺本さんから仲間に入れて欲しいと便箋五枚に文学論を熱っぽく書いた手紙が来ました。寄稿者としては先生に続く二人目でした。その後二十人余りの協力者があって正式に文芸誌「荒土」として順調に発足しました。その間、寺本さんの奥さんとの出会いがありました。第二七回泉鏡花賞を吉田知子先生が「箱の夫」で受賞され一九九九年十一月十三日の授賞式に私は車で金沢まで行ったのですが、受賞会場が分からず奥様の手を借りる羽目になったのです。私が詩の寄稿をお願いすると、詩人の寺本まち子さんは快く巻頭詩を寄稿するなど文芸誌「荒土」のグレードアップに力添えを頂いた。このように多くの人に支えられ文芸誌「荒土」は五年間で十号を出版する中で前述した「文學界」に十一の作品が取り上げられ一定の目的を達成して終刊しました。私はその後、文芸誌「荒土」と「遠州豆本の会」で書いた作品を自選集としてまとめ「酸性土壌」「おやじの背中」を自費出版しているうち二年が過ぎました。そんなある日、寺本さんから「今度は増田さんに負んぶに抱っこ」でなく我々も経費を出すから同人誌を立ち上げないかという手紙が届きました。これには文芸誌「荒土」に創作作品を寄せた方々や先生を退職した方、冬眠中の同志も積極的に賛同して年一回発行する事で「彩雲の会」を発足出来ました。平成十七年の暮れのことでした。

創作意識の高ぶり

「彩雲」は試みとして三号から編集の仕方を変え、今まで同人が自主校正された原稿を私と一人のボランティアでやって来た校正を、五人の編集同人と同人の方々にも校正をお願いしたのです。つまり、四号の例で言いますと、表紙を含め一ページから二二〇ページまでをパソコン上で編集し印刷会社に提出するフラッシュメモリーに入力します。ここまでは従来と変わりませんが、それを自家用のプリンターで印刷したものを、製本に闕けた編集同人の方と手作りで五冊のダミー本を造り、それぞれの編集同人へ送り校正したものを更に同人へ回覧しダミー本を通して校正を進めたのです。すると本に対する愛着と同人間のコミュニケーションと潜在していた創作意識が目覚め高ぶり始めました。この試みは手間と時間と経費は掛かりますが、同人の様々な想念が同人誌に反映するという得難い収獲がありました。このように動き始めた会の雰囲気が、今回受賞したことで更に加速して、五号の構想が次から次に浮かんできます。取分け表紙絵について具体的なイメージが私の頭の中で渦巻き始めました。今回の寺本さんの受賞を機会に文藝同人誌「彩雲」の質を上げ若い有能な同志を引き寄せる切っ掛けになれば有り難いのですが、そう簡単にはいきません。長い道程は覚悟しています。

（増田一郎）

「彩雲」合評会での同人諸氏

彩雲の会
〒431・2103
静岡県浜松市北区新都田二・二・二〇
☎053・428・2892

渤海 59号

風景——悪虫(わるむし)——

山口 馨

姉が来る……。

「また、雅代姉さんこんなことを」と、環(たまき)は届いたばかりの葉書を見て口を尖らしたが、連絡が暫く取れていなかっただけに、胸の内に小さなざわめきがあった。前回会った時から三ヶ月が経ち、十一月が間もなく終わろうとしていた。

〝明日寄るけど、いいかな。五時頃。

雅代〟

書かれているのはそれだけだ。文言は素っ気ないが、柔らかい筆遣いな上、いつの頃からか手すさびになったという木口木版画が刷り込まれている。その時々で意匠は変わるが、どれも鳥だ。鳥だとはわかるが種類を特定できないことが環を焦れさせていた。単に鳥というだけなのか、意味が込められているのか、解釈の仕様もない。にもかかわらず図柄もそれなりに様になっていて〝いいなあ、上手だ〟と思ってしまうから余計小憎らしい。

そんな葉書が舞い込むことがもう何度目になるのか。

到着日の翌日が〝明日〟であるように計算して投函されているのだろう。前の何度かもそうだったから。だが、電話で済むものを、と環はその度毎に、つい非難めいた思いになる。

今年五月の一寸した行き違いがこんなまだるっこしい遣り口の切っ掛けとなったのだろうと想像はするのだけれど、だとすれば随分大人気ないと、詰(なじ)りたい気持ちにもなって

いる。

旅に出かけたまま行方が知れなくなっている姉の夫、高塚和重の消息が掴めるかもと、上京の前夜雅代は訪ねてきていた。和重に関わりがあるかも知れない内容の手紙が届いたという。珍しく緊張を滲ませながら、未知の差出人と会うのだと語って出かけた。その日から三日目の夜だったか、姉から電話が入った。「今からそっちへ回ってもいいか」と。

だが環はその夜、姉のために時間を割くことができなかった。駅構内の雑踏と知れる騒音の只中から聞こえてきた、すぐにも行って話したいと早口になる姉の申し出を断らざるを得なかった。来客があった。複数の男たちの隣室でのさんざめきが雅代の耳にも届いたろうか。

高校教師をしていた環の夫、成沢省吾は三年も前に病を得て亡くなっていたが、未だに何かというとかつての教え子の悪餓鬼連が顔を出す。

その夜は海外駐在中の商社勤務の男が休暇で帰国しているからとクラスのメンバーに招集がかかっていた。〝成沢先生も交えて一献〟と、毎度の世話役からの味な誘いに、ほぼいつものメンバーが揃った。省吾の写真が飾られた仏間と客座敷とを開け広げての宴が始まっていた。

料理屋から宴会用のオードブルと寿司を取り、酒などは持ち寄るから環が準備するのは取り皿とグラスくらい。設(しつら)えと片付けは全員一斉にと、慣れたものである。

県下に名の通った進学校で省吾は世界史を教えていた。受験のための科目が優先される風潮の中にあって、どうしたって冷や飯を喰う立ち位置だった。だが、〝成沢先生の授業を受けると世界への興味が募る〟などと生徒たちに受けが良く、妙に好かれた。省吾自身が世界の歴史に並みならぬ関心があって、教科書に記載されている事柄以上にエピソードを交えて面白く話をする。

中でも中世ヨーロッパに省吾は惹かれているようだったが、何しろ世界は出来事の記憶と記録に満ち溢れている。チンギス・ハーンの西征、数度に亘る十字軍の遠征、イスラム世界との攻防等々……、話の種は尽きないわけだから、瑣末なエピソードも巧みに盛り込んで、もっと聞きたいと生徒たちに思わせた。歴史家の記述、小説家の想像、何よりも遺跡の数々が示す紛れもない史実。そんなわけで、現役の頃からよく生徒たちがつるんでは自宅を襲っていたものだった。

実を言えば環自身もその手合の一人だったが、遊びに行くことが重なるにつれて、別の意味合いで省吾が気になり始めていた。省吾にも兆すものがあったらしく、後で知ったことだが、どうやら意識は互いにするようになっていたようだ。

ただ、省吾の方からは表立つことは容易にはしなかった。

教師と生徒であることは勿論だが、何しろ環とは十才も年が離れていたのだから、男の側に相当怯むところがあったのだろう。その程度に環は考えていた。だが、卒業して、環の大学生活四年を挟んでも、はかばかしい進展がないことにもどかしさを募らせた環が、省吾に泣いて迫ってから事が動き出した。

そして、とりわけ環が急いだのは、環の家、坂下家の子供が娘二人だったからだ。姉よりも早く行動を起こさなければならない。

雅代自身が仄めかしたわけではないけれど、姉にも既に心に期した相手がいることに環は気がついていた。姉に先に家を出られては状況が変わる。気持ちが逸った。

世の中の常からすれば姉娘に婿を迎え家を継ぐ、となるのが順当だろうし、両親も暗黙の裡にそのように将来像を思い描いていたに違いない。が、環は姉が唯々としてそれに従うタイプとは思えなかった。見てくれの柔らかさとは異なり、我を通す凄りを内に抱えた人間だと捉えていた。

二才上の姉を差し置いての結婚話は親たちを慌てさせた。坂下の家とて相手の家柄を云々できたものではないにしても、父はなかなか認めようとはせず、母も環の味方にはならなかった。そんな父と母とを粘り強く説得し後押しをしてくれたのが、傍目から見れば貧乏くじを引くことになる当の雅代だった。

「今夜はごめん、とか言ってたけど、誰、今の電話」

今しがたまで、欧州駐在中の余得とばかりに近隣各国を旅して回ったという商社マンの話に沸いていたにも拘わらず、耳ざとい一人が聞いてきた。

「姉。でも、明日会うから」

実のところ、明日と提案した環に、「明日は本家に報告に行くので、私の方からまた連絡する」と電話は切れていた。そんなことから微かな痛みのようなものが胸の中に染みを作っていたけれど、それはひとまず横に置いた。

「カンの姉さんか、あの綺麗な」

別の一人が乗ってくる。

同級生たちは学生時代の愛称で未だに呼び合っていた。教師の連れ合いだからと言っても「奥さん」などと呼ぶはずもなく、〝坂下〟と旧姓の呼び捨てか、環の音読みかのどちらかで済まされていた。

「そうだ、高校に入った時、三年生にすごい美人がいるって評判でさ、教室に覗きに行ったもんな。同じ名字なのにカンと関係があるなどとは誰も思いやしない。カンとはえらい違いなんだ」

別の一人がからかった。四十年以上も前のことをよくもまあとあきれる環をよそ目に、話の流れは姉をも巻き込もうとしていた。

「そうだよ。先生とカンが結婚するというだけでも、こちらは十分驚かされていたのに、式場であの美人が姉さんだと紹介されて……」

笑い声が立つ中で、目の前に立ち塞がるように無粋な話題に振ろうとする者もいた。

「そう言えば、この家はカンの実家だろう？　ここに先生も一緒に住むようになって何年？」

何も年数を知りたいわけでも、拘りがあるわけでもあるまい。次の問いかけが腹の中にある。それはこの家と姉との微妙な空気への好奇心だ。それと、環には読み取れない、彼等の省吾への思い入れ、あるいは仲間内で囁かれていることでもあるのか、知りえた話の断片を繋げるための探りを入れているのだろうが、いずれ深い意図があっての問いかけではない。そう見越して環はさり気なく答えた。

「長いわよ。母がね、不自由になって。梗塞よ、脳。介護が必要になってからだから……、二十年、そう、二十年になる」

「もともとの先生の家はボロッチかったからなあ」

七人もいると、しかも酒の入った席だから、話がまた他所へ飛んだ。機会を待って、今しがたのそれはまた蒸し返されるのかもしれないが、さしあたり一息はつけた。

「あそこは先生が学生時代から借りていたという筋金入りの古い家だったよね。確か終戦直後の間に合わせ住宅。バラックって呼ばれてた」

付き合いが長過ぎるととんでもない話題まで飛び出してくる。

「先生はお金がなかったから」

「それに本、歴史の本がいっぱいで、床が傾いてたもん。畳もさ、気味の悪い柔らかさでさ。ああいう湿気た畳のこと、何て言うんだったけな。俺たちが行くと〝お前ら部屋で動き回るな〟なんてね」

「僕は先生に見せたかったよ、あの風景を」

海外勤務の男が突然声を上げた。

「シルクロードの西端が間近の、アレキサンダーがペルシャやインドへ向かった道さ。トルコの内陸部の……」

省吾が彼等には、彼等だけには、旅する夢を語ったというのか？　それとも彼等が暗に察していたとでもいうのか。不思議なことを聞かされたように、環はまじまじと男の顔に目を当てた。

坂下の家は農家だったが地所持ちで、雅代と環の娘二人を、それぞれが望むように都市部の大学に進ませた。娘たちも、それを当然と考えていた。ただ、卒業後しかるべき時期には二人のどちらかが結婚して家を継ぐ。多分それは雅代が、ということになるのだろうが、予定された道筋だった。

不承不承ながら父の許しが出て、環は職に就くこともなく結婚し、父が準備してくれた貸家で暮らし始めた。妹娘はあまりにも早く手離すことになったが、雅代が坂下家を継いでくれればいいのだ、何の問題もない、と父は高を括っていた。

しかし、雅代は持ち込まれる縁談の悉くに頭を振り続けた。結婚を約した人がいる。だから家には残れない。残れというのなら結婚はしない。双方、退くことをしないまま二十五才になり二十六才を過ぎ、そうして両親、ことに父と雅代とは剣呑な状態となっていた。少なくとも環にはそう感じられ、微かなおびえを胸底に潜ませることになった。

雅代は卒業後、地元に戻り役所に勤務していた。職場で知り合い、交際を続けていたのが高塚和重だった。父が承知しないというのであれば雅代は家を出ることもできたのだが、それはしなかった。時間をかけても父にわかってもらう。和重という人が、姉にそこまでの決意をさせるだけの人物なのかどうか、環には測りかねた。育ちのいい青年という印象ではあったけれど。

相手の高塚和重については、地方では名のある旧家で有数の経済人でもある家系だと父も知っていた。そうした家と縁を結ぶことを父は潔しとしなかった。また、高塚の姓を和重が捨て去るはずもない。

特に、旧家に有り勝ちな身内の争いごとが噂されるような場合は。高塚家に伏在している正嫡云々の話は、多分当事者の与り知らぬところで取り沙汰されてい、それを父も耳にしていたのだ。

父は和重に会おうとはせず、徒らに時間が流れていた。流石の環もいたたまれず、胸が痛かった。父の不興も姉の不幸にも自分が与していることが多いのだ。今度は自分が姉のために働く番ではないかと落ち着かない日々を送っていた丁度その頃だ。四年目でようやく環に子供が生まれた。女の子だった。

初めての孫娘に理沙という名前を父がつけてくれた。理沙が可愛く育ち上がっていくにつれ、祖父となった父の気持ちがどうやら解けてきていた。頑なだった雅代への態度にも変化が現れ、三十才を目前にした姉娘を解き放ってやらねばと、漸くにして頷くことになった。坂下家は孫に預けることもできるのだ。理沙に、ということになれば、氏姓の問題を考えるのはもう少し先延ばしにしてもよかった。

折柄、所有している田圃の大半にかかる宅地造成の計画が持ち込まれ、父は大胆な決断をした。多少の畑くらいは残すとして、自分が稲作を続けられる年数の残りは、と考えた時、宅地化の話は転換のチャンスだと父の判断は素早かった。土地は手放す。

農業を断念する代償なのか、あるいは別の意図があってか、父は更に周辺を驚かすような行動に出た。長年趣味で

手を入れてきた庭に離れを造ること。外見には落ち着いた佇まいながら、内部の造作に贅を凝らした小体な家。

銘木とされる木材を集め始めていた。設計は京都の然るべき建築士に任すとし、雪国の気象、湿度や気温の変動を熟知した地元の施工業者を選んだのは先々の補修を考えてのことだろう。自分の持ち場や思いが侵食されていく危機感に衝き動かされてのことではないかと環は推し量り、口を挟むことは控えた。思い通りにやればいい。

父自身は嗜まなかったが、茶室としても使えるように炉を切り、水屋を備え、玄関、控えの間、台所、洗面所、それに小振りの湯屋までと念の入った一戸が数年後、建ち上がった。幅広の欅の縁側に座れば、季節ごとに色や姿を変える樹木や花を配した庭の景観が楽しめた。

その離れに直接出入り出来るように塀も廻らし、数台分の駐車スペースも取った。同じ敷地の中の母屋と離れは、それぞれ独立した使用が可能だった。

父がどこまでイメージしていたのかはわからないが、現在は建屋と庭の風情を愛で、喜ぶ人たちの定期的な習い事や催しに供すことができている。環はいわば施設の管理人だ。電話の応対からスケジュールの調整、加えてそれが売りだから掃除や庭の手入れも欠かせない。

生前、父は「家というものは住み手が仕上げるものだ」と口煩く言い、雑巾がけを欠かさなかったから、それも環の仕事の大きな部分を占める。おまけに同級生たちの母屋への訪問も時知らずにある。理沙が結婚して夫の任地に住まいし、省吾が逝った今、環が無聊をかこつことなく過ごせるのはこのお蔭なのだ。

母の病を機に同居を始めた環一家のために父は自ら「成沢」の表札を母屋に掲げた。

ここは成沢の住まいになる。そういう宣言と取れた。

「坂下」を失くする父の無念は周囲が考える以上に深かったのか。自慢の娘から受けた思いもかけぬ仕打ちへの憤り、嘆き、恨めしさはそれ程までに強かったのか。矛先は雅代一人に向けられているようだった、雅代の戻る家には戸が立てられたようなもの。少なくとも雅代にはそう感じられたのではなかったろうか。

子供が思い通りにならない。そればかりか離反していく。世の中にはいくらもある例だろうに、父の内にも、おそらく何かが棲みついたのだ。

「連絡する」と言っていたが、環は待つわけにはゆかず、一日置いて姉の家を訪ねることにした。久し振りのことだ。姉と妹というものは大方仲がいいものだ。煩いくらいに連絡を取り合い、行き来をする姉妹が周囲にはいくらもいる。

だが、雅代と環の場合、少女時代はともかく、それぞれが家庭を持ってからは、近いとは言えないまでも同じ市内

に住みながら、どこか他人行儀だったから、環にはずっと不満はあった。姉の夫の件がなければ、互いに世間的に見れば疎遠と映る間柄を気にすることもなかったかもしれないのだ。

そもそもの原因は、姉を身動きならないような状態に一時はしてしまった遠い日にある。つまりは自分にあると環は思っているが、それにしても、という気持ちも一方では打ち消せないでいた。雅代は冷淡過ぎはしないか、と。

姉の家は郊外に連なる山の中腹にある。緩い坂道を車を走らせると、木々はてんでに若葉を吹き出し、霞がかかったような具合だ。山全体が柔らかな生き物がうずくまってでもいるように思わせた

家の前に立つと市の中心部が見渡せる。見晴らしは良いとは言え、山中で一人居る雅代の心持ちはどういう納まり方をしているのだろうか。和重と雅代の夫婦には子供がいなかった。そして今は和重が〝旅〟に出たまま戻っていない。雅代の独りは二年近くになっていた。

展望のきく位置に張り出したベランダに、スケッチブックを手にした雅代がいた。スケッチ？　呑気が過ぎやしない？　束の間、環に不審な思いが差した。

「ごめんね、おとといは」

下の道からかけた声の所在が一瞬わからなかったか、視線が泳いだが、手を振ってみせた環に目を止め、笑顔になった。

「尾長が何羽も来てたので……。でも、ジッとしてくれないから描けないの、なかなか」

平地の環の家も、母屋の側には屋敷林が未だに残っているから鳥は来るが、一々分別するほど暇ではない。ましてやスケッチなぞ。この山中ではもっと種類が多いだろうとは頷けた。そう言えばさっきから郭公が啼いていた。少し早いような気もするが、山では活発に生き物は動き始めているのだろう。

「ほら、あの枝に止まってるのが尾長。姿も羽色も美しいのに、啼き声を聞くと〝エッ〟と思っちゃう。グエッ、グエッ、だから興ざめ。でも春先、つがいでいる時は静かね」

雅代は、鳥をスケッチして版画にするのだと、デッキテーブルの上の、環には変哲のない棒切れにしか見えない木片を示した。

「何、これ」

「椿の幹。これを輪切りにして、木口を磨いて、彫る。鳥をね。好きなのよ、鳥が。写真からでもいいのだけれど、動きの特徴はやっぱりスケッチしなくちゃ。何種類か彫ってはみたんだけど。尾長もまだ中途」

のんびりとそんなことを言いながら環を部屋に招き入れると、不意に口調を変えて切り出した。用件は先刻承知とでもいうように。

「昨日、本家のお義兄さんに会ってきたわ。山谷で亡くなった女の人が持っていたという、和重さんの住所と名前が書かれたメモのこと。どういうことだったのかを報告しました。女の人のお兄さん、手紙をくれた人ね。その人と会いました。妹さんと疎遠にしていたので生前のことを聞かせてもらえはしないかと、そんな手紙だったと、そこまでは出かける前にあなたにも話したわね」

「ええ、それで？」

「そのメモって、宿帳を千切ったものだったの。記入したのは和重さんよ。あの人の筆跡。その女の人は旅館の、まあ管理人というか、受付の人でね。病気だったので和重さんがお金を貸したみたい。いつか返せる時が来たら、と思って覚えのためにそのページを女の人が取っておいた、そういうことらしい。当事者がどちらも目の前にはいないのだから、推測の部分もあるけれど」

「それって、いつのこと？」

「その旅館に泊まったのが？　それが、日付がないのでわからないのよ。でも、和重さんが泊まったことは間違いないと思う。東京にいたということが。もしかしたら、まだ……」

「山谷と言った？　それって簡易旅館、ドヤと呼ばれた所よね。そんなところにお義兄さんが？」

「お金はあるのよ。要るだけ引き出せるの。でも、必要最小限しか使っていない。毎月私、銀行に行くの。和重さんの通帳に記帳するからわかってる。ああいう旅館を利用しているとしたら一泊二千円。ギリギリの食費を一日千五百円と考えると、月に最低十一万弱。あと、都内を移動する交通費や何日かおきのお風呂や歯磨きなどの日用品、洗濯代とか……」

「お姉さん、何を言ってるの？　お義兄さんがほとんど……、ほとんど路上生活者のような毎日を過ごしているというの？　何故そんなことをしなくちゃいけないの？　高塚家の人よ。役所で部長まで務めた人よ。不自由なく暮らしてきた人じゃありませんか。酔狂が過ぎやしませんか」

「環ちゃん、待ってよ。ただ〝旅〟をしたいというだけなら、あのまま働き続けることもできないわけじゃなかったのね。でも部長で定年になると、それなりの実務というか働き場所が用意されているの。その場になってからでは断るのが難しい。余程の事情か病気かでなければ、新しい職場に迷惑をかけるだけではなくて、後から来る人の道を潰すことにもなりかねない。前例を破るというか壊すことはできないの。あの人も計算はしたと思う。身を引くタイミングは計っていたはずよ。でも……」

「ん？」

「お母さんが亡くならなければ、踏み出しはしなかった。お母さんを落胆させるような行動は取れなかったのよ。丁

度、というのは適切ではないかもしれないけれど、丁度転身への意思表示をしなければならない時期にお母さんが」

高塚家の内実については環も疾うに承知していることだ。先代から会社を引き継いだ長男の重信に対して和重の母が屈託を抱え続けていたことを。

「で、でもよ、百歩譲って、お辞めになるのは、まあ、いい。それは自分の都合なんですから。でも、こんな旅は、はっきり変よ。引き止めないお姉さんも悪い。皆に心配をかけている」

「誰に？」

「高塚の皆さんも、お姉さんにも。私だって心配をしている。今みたいな話を聞かされたら尚更よ」

雅代は黙って俯いていたが、環に同意したという様子ではなかった。

「考えてみる」

「え？」

「もう少し、あの人のことを考えてみる」

そう言ってから突然「あっ」と声を上げた。

話の流れが流れだけに何事かと驚いて環が顔を窺うと「思い出した」と雅代は口元を緩めていた。

「記帳に行った時ね、今月はちょっと多いな、引出し額が、と思ったことがあったの。二月よ、今年の。多いといっても普段の、私たちの感覚からすれば、ほんの僅か。だから見過ごしたのね。あの時、あの旅館の女の人に貸して上げたのだわ。ああ、三ヶ月前、和重さんはあの場所にいたんだ」

嬉しげに一人頷く雅代の様子に、今日は上京の顛末を聞くだけに留めようと環は思った。

「それにしても、お姉さん、よく一人で……。知らないで言うのも何だけど、ちょっと怖そう」

「うん、それがね。高塚のお義兄さんが、東京で仕事してる由美ちゃんに連絡を取ってくれて」

「え、じゃ、叔母と姪の女二人で？」

「由美ちゃんがお付き合いしている青年が一緒に行ってくれたの。心強かったわ。一人で動くつもりだったのが連れが出来て。そしたら自分がどんなに不安だったのかがわかりましたよ。頼りきっちゃいました」

「由美ちゃんは姉さん夫婦に懐いて、この家によく遊びに来てたみたいね。理沙より余程可愛いかったでしょ」

「どちらも可愛い。和重さんに繋がる由美ちゃん。私には理沙ちゃん。省吾さんも理沙ちゃんを連れて寄ってくれたじゃありませんか。あなたもね。でも、こちらからはなかなか会いに行けなかった。敷居が高くて」

「家、貰っちゃったから、成沢が。わたしらが」

「何を言うの。それでいいのよ。その内、理沙ちゃん一家も戻ってくるでしょうし。お父さんの望んだようになるかもしれない。それに、お父さんは親不孝な娘にもそれなり

のものは残してくれましたからね。環ちゃんが気兼ねをすることは一つもありません。あなた方夫婦がお母さんにもお父さんにも良くしてくれて、本当に有難いと思ってる。省吾さんにも感謝感謝だったのよ。気難しいお父さんの面倒をみて寿命を縮めたのかもね」

一時、昔語りになったが、雅代がつと口調を改めた。

「心配してくれてありがとう。あの人のことが少しはわかっているとは言っても、不吉な場面ばかりが掠めて不安で堪らない時期もあったの。あなた、こんな新聞記事を見たことはない？　〝不明長男見つけた〟という見出し。去年の秋。母親が行方不明になった長男を探そうと、警視庁の『行方不明相談所』で全国の身元不明遺体を集めた資料を閲覧したそうよ。そしてとうとう、見覚えのある下着のロゴマークを手掛かりに本人と確認することになったって。遺体よ。遺体が身に着けていた衣類や靴・鞄の写真、発見された場所・日時などがわかるようになっているのだって。体が震えたわ。あろうはずがないと思っていても、毎月預金の引き出しを確認するまでは落ち着けない。山谷とそうは離れていない浅草には場所柄でしょうね、その相談所の出先があるそうで、覗いてみたい気持ちに駆られることもあったの。随分後になってからインターネットでも資料を検索できることを知ったけれど、開けないわね。そんな怖いこと」

雅代は言葉を切って、居住まいを正すように椅子に座りなおした。

「でも環、妙な想像はしないでね。あの人は帰るために出かけたのだから」

それから間もなく雅代から葉書が届いた。

〝上京します。由美ちゃんのことで〟

半月程して、今度は軽い調子でまた葉書が。

〝由美ちゃんが、あの親切で感じのいい青年、三原俊介さんと結婚することになりました。二人が家を憚って踏ん切りがつけられないようでしたから、わたくしが少し動きました。〟

どちらにも鳥の木版が捺されていた。一枚目の木版画は環も目の前で見たから、その姿で尾長とわかった。大急ぎで仕上げたのだろうか。

鳥の名が特定できない二枚目は手持ちの版を起こしたのか。大き目の文字のメッセージに続いて、細かい文字でいきさつが書かれていた。

高塚本家の一人娘、由美は会社を、そして家を、継ぐことはしないのだという。父親の会社絡みでない以上、友だちと勤め先の同僚だけでのレストランウエディング形式で済ましたいという若い二人の案を親たちが受け入れたと。いずれ地元での披露宴は考えているにしても。

高塚もまた坂下家の伝を辿るというのか。時代は少し変わったのだろうか。離れの柱を磨きながら環は思いを転がしていた。

昔、檜の柱に鉋をかけながら大工の棟梁が話してくれた。

「おこがましいようですが、わたしら三百年先を読んで仕事に当たります。だから木を活かす技を磨かなければあかんのですわ。三百年後に修理せざるをえんようになった時、〝おおっ〟と言わせたいもんです」

三百年までは想定しないまでも、父は慈しんで手をかけて残していけるもののことを考えていたのではないか。

棟梁が掛ける鉋の下から美しい削り花が溢れるのを父と一緒に溜息をつきながら見たものだ。削りとられてもあの花のようには人はいかない。せいぜいできることは、在るがままの今を丁寧に拭き続けることではないのか。たかだか二十有余年ではあるが、古色を帯びつつある離れを愛おしい者でも見るように環は暫く眺めていた。

環は姉の夫、和重について想像を巡らしてみることがある。

刷り込まれた傷のようなものを和重が引き摺っているとして、変化する時代とは遠いところで、棄てられなかったもの、棄てられないが故に目に触れぬように埋めるしかなかったものをわざわざ取りに戻るような行為。そんなことが大人に許されることなのかどうか。

和重の兄、重信は正妻の子ではない。和重が生まれる前、父親は自分にとって初めての息子を引き取り、長子として妻に預けた。

父親の薫陶を得て会社経営者として成長していく姿を常に後ろから見ていて、兄と肩を並べる、あるいは取って代わることを和重はいささかも考えることがなかったろうか。

和重の傍らにはいつも、権利を主張して止まず、実の息子の背を押し、煽り、耳元に何事かを囁き続ける母親の執着があったとしよう。それを障りなく穏当にかわし得たものかどうか……。環には見えないものが多すぎた。

和重が近年になって度々口にしたという言葉も姉から聞かされていた。「もういいだろう。この辺で生き方を変えたいんだ。楽になりたい」。

いい年をして何と甘えた言い草だろう。無責任だ。誰だって楽ではない生き方をしている。それなりの働きも示し優遇されたはずの仕事を嫌だ嫌だと思いながら携わってきたとぼやいては、仕事に対しても失礼というものではないか。

環は腹立たしかった。そして和重当人よりももっと雅代にも納得のいかないものを感じていた。

〝時間が取れる時に来て欲しい。八月中は家にいます〟

そんな葉書が届いた。今回のは鳶なのだろうか、翼を広げて飛んでいる鳥の姿だ。羽の先の細かい切れ込みまでが彫り込まれて、手の込んだ版だ。予め電話をして環は出かけた。

可笑しいのだ。姉は常に携帯を手元に置いている。「放さないわ、お風呂だって、トイレだって」と言う。だから、掛けた電話が待たされることはない。もっとも、掛けたことは多くはなかったし、今は禁じられているのだが……。いつ、夫から電話が入るかわからない。自宅の電話も呼び出し音四回で携帯に転送されるようにセットさえしてもらっていた。

それにしたって長話をするわけではなし、このスピード時代に葉書はないだろうと白けながら、一方で、案外版画を見せたい理由とか拘りとかがあるのかもと、安直に、幾分かの皮肉も込めて思いもした。

「話もだけど、今日はね、見せたいものがあって」

雅代が招き入れてくれた部屋は、いわばアトリエとでもいうのか、中央に作業机があって小振りな木工具とおぼしきものが並んでいた。

「それはビュラン。彫刻刀みたいなもの。ここは、うちの人の作業場。もともと版画は和重さんが始めたことなの。かなり以前からね。展覧会で見てから木口版画にすっかり。道具類のこととかで、最初だけは習いに行ったんだけど、あとは一人で」

雅代が指差す壁面には数点の、なかなか見応えのある作品が掛けられていた。思わず近寄って、歪な円形に象られた黒い、細密な図版に眼を凝らした。直径六、七センチに満たない画中に花弁がひしめいているもの。種類の様々な鳥の羽根が幾層にも重なっているように見えるもの。我知らず大きく息を吐いていた。

「辛気臭い作業。気が遠くなるような細かさ。何時間も根をつめて黙ったまま……。苛々したものよ」

台の上に置かれた、椿だという版木は、その小ささに似合わずギッシリと詰まった年輪で太刀打ちの容易でないことを示していた。手強い相手。

「でも、あの集中には引き下がるしかなかった。針先のような一点一点を穿ち続けるのめり込み。初めは単純な図柄が数年経つ内にだんだんと密になって、濃い絵になっていった。まるで胸に仕舞われていた形にならない面倒な代物が、小さな塊になってポロリポロリと吐き出されて来るみたい」

雅代の言うところでは、彫ることに限らず描くにしろ捏ねるにしろ、一般にものを造る人たちが、そのことによって内面のエネルギーを消化したり置き換えたりするのとは、和重のそれは一寸違う。

我を忘れてひたすら刻み続ける、そんな作業の只中で、和重は自分の内の言葉にならない混沌としたものに向き

合ってしまった。際限なく繰り返す単調な作業というものは、潜んでいた魔物を引き寄せることがあるようだと。

改めての発見と、確認せざるを得ない時間とに出会ってしまった。それが形を伴って迸り出る。

環には今ひとつ得心がいかなかった。精進というよりは苦行のように打ち込んだ和重の作業が、無理矢理口の中に手を突っ込んで、出さなくてもいいものまで引き摺り出してしまったということだってあり得る。どうにも鬱陶しいことだなとぼんやりと感じたまでだった。

そこへ、「省吾さんもね」、と思いがけない名前が口にされた。

「え？」

「省吾さんが遊びにいらしたことがあったわ、うちの人が椿と格闘している時に。八つ年下の和重と私を律儀にお義兄さん、お義姉さんと呼んでくれた省吾さん。教養人というのは、ああいう人を指すのね。いろんなことに精通してらして、その癖、驕らず高ぶらず。今頃になってなんだけど、あなたには勿体ないような人」

姉の言葉は、この場合そのまま受け取っていいものかどうか。そして、それに続いた話には胸を衝かれた。

「でね、省吾さんが、そのひたすら細かい作業を目にして、こんなことを言われたの。〝私も事情が許せば、歴史的な地域で発掘作業に携わりたかった。結果が出るのか、終わりが果たしてあるのかと疑わせるような際限のない土掘りを。そうでなければ古美術品の修復のような仕事を〟ってね。トルコやエジプトや、シルクロードのどこかで、と思いつく土地の名前を挙げながら、一人笑いをなさった。あれは、ご自分の病気を知らされた後のことだったかしら」

事情が許せば？　〝先生に見せたかった風景〟と友だちが口にした、あの夜の場面が一瞬、環の脳裏に甦った。省吾が甲斐のない夢を見ていたということ？　環は言葉もなく姉の顔を見つめ、肩を怒らせた。

「間もなく和重さんもビュランに触らなくなった。〝何故？〟と私は問いかけなかった。理解したなんてご大層なことではなくて、あの人の思いに添おうとだけ思ったの」

夫が行く先も明らかにせず〝旅〟なるものに出かける。それを見過ごしにするようなことは環なら、やりはしない。相手に縛りを掛ける。当然だ。

亡くなって何年も経ってから本音の呟きが聞こえて来るような始末だとしても、最終的には省吾が環を採ったのは明らかなのだから。それとも、成沢の名前だけは立てながら、その実、それと気付かぬまま手前勝手な思惑で省吾を振り回してきたのだろうか。

あるいは、気付かぬ振りをして心中に秘かに別物を飼っていたのは自分の方なのか。この安穏な日々は、無神経な独りよがりが作り上げたものなのか。

姉は環のようにはしなかった。昔、父と果てのないような諍いをしながら守りきった和重を、今また見守ろうとしている。

それでいいのだろうか。私だって守った。〝守る〟という言葉面だけなら同じとも捉えられようが、姉の方法が許されるのだろうか。

「和重さんが出かけてから、ここに座ってみたの。手が勝手に動いて道具を握り込んでいた。それからは見様見真似。あの人が集めていた鳥の羽、そう、そこにある平箱に飾ってある羽。雉だの、山鳥だの、小鴨だの、色々。紙に描いてみて、木の大きさに合わせてまた描いて。堅い木だから手こずったわ。小さいから余計。手前味噌だけれど、形らしきものになると単純に嬉しかった。楽しかった。でも、あの人の渦巻くような黒には到底ならない。かける時間が短いのだからなるわけもないのだけれど、ここに」

そう言って雅代は自分の胸を、あてがった手で何度か軽く敲いた。

「ここにあるものが根本的に違うのよ。技以前に違いが出るのね」

それから部屋を移り、バルコニーの先に市内が眺望できるテーブルに向かい合って座った。

「夏でも、ここは涼しいわ。窓や戸を開け放っているから風が通って昼間は冷房いらず。夜は流石に蚊が多くて網戸だけでは、ね。でも充分快適。そんな暮らしをしていると、堪え性がなくなって。だから、この間の東京は厳しかったわ」

姉が、あの五月以降、何度か上京していることは聞かされていたが、ごく最近にも行ったというのか。

「由美ちゃんのところ？」

「ううん、会ったけど、例の結び役の用でちょっとだけ。ねえ、環ちゃん、前に話してた旅館の女の人ね、あなただったら初めて出会った人にお金貸せる？　いくらお気の毒だって数万円をよ」

「それは……。気持ちはあっても、余裕があっても、しない、と言うか、出来ないわね」

「そうでしょ。和重さんはその宿の馴染みだった。それなら、わかる。あの人なら貸すでしょう」

「その人、綺麗だったのかな」

「馬鹿を言うのはおよしなさい。ま、それはそれとして、私はこう思ったの。あの人は、あの界隈を、泪橋のあたりを嫌ってはいない。間遠だとしても繰り返して利用しているということ。例え三畳しかない部屋でも布団で体を休められるから」

「お姉さんは、お義兄さんが何故そんなことをすると思うの？」

「あの人は、多分」

「多分？」
「地べたに座ってみたいと……。何にも無いところに自分を置いてみたいと」
「変よ、それは。そんなことまやかしよ。地べただなんて、よく言える。実際はね、稼がなくてもいいお金を持っていて、いつでも援けを呼べる携帯も持ってる。お姉さん言ったでしょ、運転免許証も健康保険証も持参している。ちゃんとした家族がい、住所もある。不足のない環境にいながら、ごめん、悪いけど、お義兄さんはふざけてる」
笑いを含んだ声で答が返った。
「環ちゃん、さっきの省吾さんの本音の話で一寸へこんじゃった？　一矢報いたい、なんて。でも感情的にならないで。私も考えの纏まらないところもあるけれど、こんな風にも思えない？　沢山持ってても、依って立つ一点が不確かなら人って平穏ではいられないんじゃないかな。自分の軸っていうか……。不味いやり方であろうと、遅すぎるとわかっていても、踏み切らざるを得ない。そんなこともあるでしょ。和重さんも、あの町、例えば泪橋の辺りで、たむろしている人たちと同じになれないことはわかってる。そんな無礼なことは考えてはいない。あの人には自分を抛り出してみる時間が必要なのよ。これは私の想像でしかないけれど、多分」
傍らのマガジンラックから地図を取り出して雅代は指差した。東京都台東区の地図だった。何度も手にしたらしく折り目に痛みが何ヶ所もあった。
「訪ねた旅館はこの辺り、台東区の北部ね。今度は一人でバスに乗って出かけたの。五月に行った時は、由美ちゃんのお相手が車を出してくれて、様子はおおよそわかったから、今回は一人で。区内を循環するバスというのがあって、コースが三つ。北の方を少し歩いてみようと思った。上野から浅草に出て、二つ目のコースに乗り換える。隅田川沿いにしばらく走ったところで一旦降りました。区民の足になっているようで、十五分おきに次のが来るとわかったから」
途切れない姉の話に、それでも興味をそそられて耳を傾けた。
「隅田公園。一つ前の停留所が花川戸。どちらも聞き覚えのある名前で、どういうんだろう、気持ちが和んだというか……。次のバス停まで歩いて、乗って。橋場というところでまた降りたのは、老人福祉館が近いと表示にあったからかな。〝ここで降りよう〟と思ったのには理由はないの。偶然というか単純な気紛れよ」
「お姉さんに、そんな無計画なところがあった？　なんか変よ。別の人の話を聞いてるみたい」
「環ちゃんには話してはいなかったけれど、私、何度か上野までは行ってたの。無計画というか無謀というか。今や

私にすっかり馴染んだやり方になってるわ」
「えー、それってお義兄さんが出かけてからのことね」
「上野公園で場所を変えながら、一日座ってたり」
「お姉さんが？　わあ驚き。そんなことをして、おかしな目に、そのう、危ないような目に遭わなかった？」
「ないわ。むしろ小父さんたちが、その……、ホームレスの人たちが、〝寝るところあるのか？〟なんて気にかけてくれたわ」
「お姉さんのような奥様然とした女性を宿無しだと普通思う？」
「公園をねぐらにしている人たちだって最初からみすぼらしい恰好でいるわけがないでしょ。段々とそうなる、ならざるを得ない」
「でも何故東京なの？　どうして上野なの？」
「日比谷かもしれない。新宿とか池袋とか、新大久保の方にもその手の人が多いと調べました。その時その時で動いているかもしれないけれど、あの人がひっそり身を置くのは東京だという気がするの」
「ああ、もう、妙な話ばっかり」
「そうね、妙なことが起きてる。橋場でも起きたのよ」
環はまじまじと雅代の顔を見つめた。
「橋場町を歩いていたら、気が惹かれる看板に行き当たったの。『皮革産業資料館』。昔、皮をなめす仕事に従事した人の多かったところでもあるのかな。そんなことも思いながら入ってしまったわ。多分、日常ではまず起きない感覚が働いてしまったのね」
「皮製品の展示？」
「ええ。でも資料と言うからには、鞄にしろ靴にしろ歴史を感じさせる古い品々が並んでいたの。それに、参考まで、の意図なんだろうけど、お相撲さんのやけに大きな靴だとか、有名歌手のとんでもなく高いヒールの靴、中国の纏足婦人の見るだけで息が詰まりそうな小さな靴なんかも」
そこまで言って、雅代は大きく息を吐いた。
「ある靴の前で、動けなくなってしまった」
「何か？……」
「くたびれた編み上げ靴があったの。汗、脂、汚れ、傷、そんなのがみんな皮に染み込んで、グズグズになった靴。戦時中の中国大陸を四年間歩きに歩いた兵士、陸軍の兵隊さんの靴なんですって。痛ましい姿を曝しているその靴を見てたら……。涙が止まらなくなったの。私は戦争のことは知らない。でも、一人の人の戦いはずっと見てきた。その靴は私を揺さぶったの」
その場面が甦るのか、俯けた顔をなかなか上げようとはしなかった。
「ボロボロ涙を流している私の傍にお婆さんが近寄ってきて、〝泣きなさい、泣きなさい。辛かったろう〟と言って

くれた。勘違いよね。少し呆けているのかもしれない。でも私は本気のいたわりを感じてしまった」
「お義兄さんのことを連想してしまったんだ」
「でね、関係のない人様の前でさんざん泣いて驚かしたから、恥ずかしいやら申し訳ないやら、お婆さんにお詫びして出ようとしたら、その人、私の腕を掴んで放さないの。家がわからなくなったって言うの」
「ええっ」
「館の人に聞いたら、少し先の老人施設にいる人だって。時々やってきては例の靴をじっと見ているのですって。この人の方が現実に息子を戦争で亡くすかしたのじゃないかと私は思ったわ。施設まで送って行きました。あの、例の旅館の小路が目の先のところでした。お婆さんは施設の玄関で駄々をこねるの。〝息子の嫁だ〟と言い募って。係りの方に宥められて、ようやく、という成り行きでした。でも、私はお婆さんに約束をしたの。〝必ず、また来ます〟って」
それを言う時の眼差しが物語っていた。雅代が心に期したことが何なのか。環の想像は誤ってはいないだろうと思った。姉はまた、出かける。そして、出かけるだけではなく……。
姉は言った。有無を言わせぬ口調だった。
「時間が欲しいの。私から連絡するまで放っておいて」

五時ごろ、の約束に違わず雅代が成沢の門を敲いた。
「二ヶ月ぶり」、と快活な第一声だった。
「変りはないの?」
「ない。和重さんからは相変わらず何の連絡もないし。私、折々メールはしてるの。読んでいるのかどうか。敢えて着信確認はしていない。携帯の使用明細、家に領収書が届くから、電話を使っていることはわかるわ。派遣の仕事でもすることがあるのかな、と想像するだけ。この頃の日雇い派遣は携帯で派遣先が指示されるそうだから。つまり、充電はしてるってこと。だから私があの施設、お婆さんが入所している施設近くにアパートを借りたこともメールで」
「エッ、お姉さん、東京でアパートを?」
「うん、それをあなたにも話しておこうと思って今日」
「移ってしまうということ?」
「違う、違う。行ったり来たりするにしても、その方がいいかなって。まだしっかり決めてはいないけれど、そういうパターンも考えているの。思いがけないところでお父さんに残してもらったお金が役に立ってるわ」
「いつまで続ける気?」
「さあ……」
「それで、お義兄さんとは会えそう?」
「見つけるために行ってるのじゃないもの。ドヤとまではいかないけれど、安い1DKのアパートで午前中は木を

彫って、午後はお婆さんお爺さんの施設で昔語りを聞かせてもらうボランティアみたいなこと。それも決めてきた」
「あ、あの送って行ったお婆さんの施設」
「そう、そこ。あのね、あのお婆さんもそうだったけれど、歩き回ったりして一見、元気そうに見えても、あそこにいる老人たちは病気を抱えていて、それも治る見込みのない病で、独りで、先のない暮らしを耐えている。お婆さんに会いに行って、施設の人に聞いたわ。だからでしょうね、若い時代の話をしたがるんですって。もてた時の、稼いだ時の、愉快だった時の、勇ましい話。そうかと思えば、意気地なく涙を流したり、恨みのたけをぶちまけたり。とにかく誰かに話をしたいのよ。誰かとの繋がりが欲しいの」
「お義兄さんはどうなるの。見つけるためにじゃないって、どういうことなの」
「私ね、前にも言ったと思うけれど、考えていたいのよ、あの人のことを。考えることで近寄りたいの。当然だけど、二人が同じようには動けない。夫婦だけど、違うんだもの。だけど、家庭というものの最小単位だよね、夫婦って。別々なんだけど似通ってる。そうね、あの人は昔、出会った時から何かを探していたし、私も探していた。あの人は見失ったものを、私の方は多分、欠けているものを。出会ったその時から、まるで同志」
姉は照れたように笑った。

何かやる、姉はきっと、と思っていた。だがそれは環には到底選べないやり方だった。殊によると姉は、妹の平穏な人生を、平板で退屈なと、ちょっとからかってみせているのかもしれない。知らぬ間によくない何かを浸み出していながら、遂に気付くことのなかった妹の無邪気な人生を。
言葉を失っている妹を、雅代が悪戯っぽく覗き込んだ。
「いけない?」
「いけなくはないけど。お姉さんが違う人になったみたいで」
「私、少し悪くなった?」
「そうじゃないけど」
「環」
呼びかけて雅代は優しい目になり、環の手を両手で握りこんだ。
「悪いって、強いってことでもあるのよ。あなたも、そう、思うでしょう?」
環は、姉の掌にくるまれた自分の手を黙って見つめた。

「渤海」59号より転載

山口　馨

やまぐち　かおる

1942年生まれ

文芸同人誌「渤海」にて小説執筆

「とやま文学」ほか地方誌紙にて小説、エッセイ、コラム発表

2008「風景―イヌイットの皮袋―」で第2回「まほろば賞」優秀賞

09「風景―月壷―」で第3回「まほろば賞」優秀賞

作品集に

『山口馨01 － 03』

『山口馨04 － 08』

小説集『風景』

富山市在住

渤海

富山県

編集者の仕事

この欄で「渤海」を紹介させて貰うのは二十四号、三十号に続いて三回目となる。当誌が、一九七四年（昭和四十九年）の創刊以来、作品を「書く」、同人が「寄る」、経費を「出す」を基本に続けてきたこと、富山県の文芸同人誌の環境にも触れさせて貰った。

先の二回では些か胸を張りすぎた観があるので、今回は編集の内情を書かせて頂きたい。同人誌に関わる姿勢を自らに問う形になるような気がする。多分、恥を書くことになると思うが、折角の機会を活かそうと思う。

編集と言っても、本誌「文芸思潮」のように、全体を眺め、読者との間に立って、工夫の限りを尽くすような苦労をしたことはない。単純な仕事をしているに過ぎないと思う。卑近な例だが、同人誌運営の実情を伝え、苦労を共有して頂ける方が全国でお一人でもおられれば幸いである。

「渤海」は、春季号、秋季号と年に二回刊行している。当然、年に二回の締め切りがある。編集の仕事の最初は、まず、締め切り日に向かって同人の原稿を待つことから始まる。しかし、約束どおりに原稿が集まることはない。原稿の入った封筒が余裕をもって届けられることは希にあるが、大概は詫びの電話と葉書が届くことの方が多い。堪りかねて、締め切りに間に合わなければ次の号に回させて貰うと公言したこともある。しかし、仮にそのとおり実施すると、頁数の薄い雑誌を読者に届けることになる。それで、つい期限を切って許してしまう。「読者が待っているのだから、何とか頑張ってみて下さい」と励ますことさえある。

次は、届いた原稿に目を通す。精読して書き手に感想を伝える。細部の表現についても忌憚のない意見を言わせて貰う。そして、二稿の期限を同人の方から申告して貰い、

2010.7月「渤海」県外研修
新潟県佐渡市下相川・「史跡佐渡金山」にて

また待つ。一寸した字句の訂正ぐらいなら、印刷された初校で手を入れて貰うことにしている。

そして、二稿が届く。これはざっと目を通す程度だ。すでに印刷へ回す期日が迫っていて、三稿を求めることが出来ない場合が多い。

以前、「一番レベルの低い作品が、同人誌の水準を決定する」と聞いたことがある。滅多にこの言葉を使ったことはないが、心を鬼にして、辛辣に言うこともある。さぞ傷付けたことだろうと思うが、その言葉で奮起して貰うのも編集者の仕事だと思っている。

そうして、小説、エッセイ、詩、短歌などの作品が揃うと当号の掲載の順番を決める。小説が主体の同人雑誌だが、必ずしも質の順番とはしない。しかし、やはり読んでもらいたい作品を巻頭に持っていく。そして、小説の間に、エッセイや、詩、短歌を配していく。

それから、「編集後記」を書く。同人誌を受け取った人が最初に開く頁らしいので、自身の作品よりも丁寧に書いている。その号の作品に触れることはなく、もっぱら小説を書き続ける意味を問う、辛口の随筆を書くことに努めている。同人に反感を持たれかねないぎりぎりのところで書いている。それでも、同人諸氏の目にはいつも厳しく映るらしい。

合評会の会場を予約し、懇親会の居酒屋の二階もお願い

して、作品を印刷所に送る。パソコンのフロッピーデスクも添える。ほどなく初校が届く。パソコンがほとんどだから、印刷所の作業は早い。その初校を各同人に発送して、各自念入りな校正の後、印刷所へ送って貰う。そして、真新しい号が編集者宅へ届き、日を決めてみんなで発送作業を行う。編集とは別だが、新年会の手配、夏季研修のだんどりの仕事もある。ここらは極めて事務的な作業である。そして、一ヶ月半くらい後に合評会を迎える。作品を載せている同人はほとんど揃う。県内の他の同人誌の方、やがて「渤海」に参加したいと思っておられる方も参加される。進行司会を決めて、順番に作品を評して貰う。

ある雑誌から、「日本文学の砦としての同人雑誌」というテーマで原稿を求められたことがある。「敢えて『砦』と言えるとすれば、それは真摯な合評会の持続ではないか」と答えた。皆、安易に他の同人の作品を褒めない。例え、厳しすぎて書き手の機嫌を損ねることがあっても、自分の感じたままを伝えることの方にみな心を砕いている。そうして、懇親会で次作品での奮起を期して貰い、編集者の一行程が終わる。

これで良いのか、まだやり方があるのではないか。いつも疑いながら役割を務めている。

同人の高齢化、捗らない若い書き手の発掘。いくつかの課題を抱えながら、まずは誇れる次号を世に問うことに腐心したいと思う。

今年で創刊三十七年、この春で六十一号を数えた。「規約」に謳っているとおり、そろそろ年四回、本当の季刊に踏み切らないかと提案するが、未だ同人の賛同は得られていない。

（杉田欣次／文芸同人誌「渤海」編集委員）

渤海
〒930・0916
富山県富山市向新庄町二丁目四・五
杉田欣次方
TEL076・451・7770

同人雑誌優秀作

まくた 31号

親子で鬱病

平井文子

ソラナックス一錠と加味逍遥散料一包を流し込んだ。

就寝時に必ず、蓋付きの大きなカップに水を入れておく習慣は十年以上続いている。前夜うっかりその習慣を忘れてしまい、目覚めたとき、ベッドの横に置いてあるはずのカップが目に入らないと、目覚め時の恐怖と不安感が募ってくる。体が気だるく洗面所まで水を入れにいくのが億劫だ。それでも薬を飲まないわけにいかないから、気力を振り絞って起き上がり、洗面所の蛇口から冷たい水を汲み薬を飲む。これが加納芙紗子の朝の始まりである。

目覚めた瞬間の怖さというか、なんともいえない憂鬱さは十代の中頃から始まっていたような気がしている。

――仕事にいきたくない、休もうかな、でもこの気だるさと憂鬱さは毎朝のことだからキリがない、やはり出勤するしかないか――、そんな葛藤を繰り返すのも毎朝のことである。あと三分だけ寝ようと頭から布団を被り目を瞑るが、モゾモゾと足を動かすだけで、エイッと気合をかけてすぐに身を起こす。よろよろと洗面所へ行き、歯を磨き冷たい水で洗顔をし、メークにかかる。その頃には心のざわつきが少し収まっているが、隣室のキッチンから伝わってくるどんよりとした重い空気が心に刺さる。

一DKという単身用の狭い間取りのキッチンを占領して息子のエリアがある。

十六年間の引きこもり息子。三十六歳の強迫性障害と鬱

病を併せ持つ息子の、ゴミ箱と化したようなエリアからは物音ひとつしてこない。起きているのか寝ているのかわからないから、ほんの少しだけ襖を開けて覗いてみる。目を瞑っているから寝ているのであろう。蓬髪と髭ボウボウの息子の目を閉じた顔は仙人を彷彿させる。

山積みにされたタバコの吸い殻とカップラーメンの空パック、スナック菓子の空袋、スポーツ新聞、そしてつけっぱなしのパソコン。いつもの情景がそこにあった。

芙紗子は前日帰宅した時、ハンガーにつるしたままの服に袖を通し、昨日と同じパンプスを履いて都営住宅の階段を降り、重い足を引きずりながらバス停にむかった。

いつも会う女性が寒そうに立っていた。

「おはようございます。寒いですねえ。腰の具合はいかがですか」

会うたびに腰のまがり具合がひどくなっているようなので芙紗子は気になっている。

「おはようございます。あまりよくはないんですけど、しゃーないね」

と、白い歯を見せた。笑うと八重歯が見え、一瞬少女のような表情になるが、芙紗子と同じ六十歳半ばくらいであろうか。介護の仕事をしているという。腰をいためるのは職業病でもあるらしい。介護士が辞めていくのはたいていい腰を痛めたためだと言っていた。

定刻通りにバスがやってきたことなどめったにない。いつも遅れがちだ。

「あまり無理しないようにね」

「お互い様にね。もう若くないんだから。ふっ、ふっ」と、再び白い歯を見せた。

バスを待っている人たちがいっせいに右をむいている。右手からバスの前面が見えてくるとほっとする。二、三秒間の幸せを感じる瞬間である。

二駅で赤羽駅へ到着する。改札口をくぐるとホームの階段の下まで人が溢れていた。また今日もかと、芙紗子は思った。人身事故による遅れは珍しいことではないのだ。特に埼京線に多いのはどういうことなのだろう。ほとんどの人たちが携帯電話を耳に当てている。

「こういう時代だから、まだまだこんな状態が続くんじゃないか」などと、諦めたように言う男性の声が聞こえる。芙紗子はコーヒーを飲む時間を見込んで充分早めに家を出ているので、勤務時間に遅れることはないはずだった。

人が動きだすのをぼんやりと待っていると、寝起きの瞬間ほどではないが、いつもの得体の知れない不安感が押し寄せてきて、胸のドキドキがはじまった。じいーっと目を閉じて耐えるしかない。目を閉じていると少し楽になるような気がするが、体の気だるさは治まらない。

リタリン、レキソタンなどと、十年以上もの間に薬を変え病院も代えてみたが、いっこうに改善の兆しがみえなかった。一年くらい前から飲んでいる薬が比較的芙紗子にはあっているような気がしている。

十五分遅れて電車が動きだした。指を動かすのさえままならないような混雑振りだ。斜めになったままの片腕で、力いっぱい体を支えていると、どういうわけか面白くなってきた。とにかく不安とか憂鬱とかを感じている場合ではないのだ。芙紗子は修羅場が嫌いではないという性格に気付いている。

別れた夫に暴力を振われ、血だらけになって泣き叫んでいる最中でも、芙紗子にはどこか冷めているところがあって、相手の興奮振りを面白がっているところがあった。

とにかく、退屈と平凡が苦手なことは確かである。

新宿に着き、地下道を通り、都庁へ辿り着くまでの途中にマクドナルドがあるからコーヒーを飲むことを習慣にしている。コーヒーが一二〇円というのはありがたい。

温かいコーヒーをすすりながらタバコをくゆらせていると、ほんの少しだけ心が落ち着く。小さな音量でジャズが流れているのも悪くない。十分などあっという間に過ぎてしまうが、芙紗子にとって、このひと時は欠かせないものである。

店を出て地下道広場を通りぬけると、都庁第二庁舎に辿り着く。

雨の日には地下道広場に大勢の路上生活者たちが寝そべっているが、今日は晴れているので数は少ない。髭や髪の毛を伸びっぱなしにしている人を見ると息子が思い出されて、索漠としたものが胸をかすめる。

芙紗子は、午前中は都庁の閲覧室で不動産及び建設業者関連のファイルを閲覧して、午後からは人形町にある支社で閲覧内容を見ながら、その会社の概要を中心とした簡単な記事を書くという仕事を八年間続けている。

長年同じことを繰り返しているから要領もわかり、つらいなどと思ったことはないが、人間関係がつくづく難しいものだと思うようになったのは、新人の二人の女性が入ってきてからのことだ。

以前の女性二人とは特別のトラブルなどもなくスムーズに仕事ができていたのに、ひとりに乳がんが見つかり、もうひとりは父親の介護のために、二人とも一ヶ月くらいの差で辞めてしまった。その後任者として入ってきた現在の女性二人とはどうしてもしっくりといかない。

A氏とN氏、それから新人女性のYさんとIさんと芙紗子を含めた、男性二人女性三人がこの仕事を担当している。

細長い机をはさんでIさんと芙紗子が並び、向かい側にはA氏とN氏とYさんが一列に座っている。

「おはようございます」と声をかけると、男性たちは「おはよう」と返してくれるが、どういうわけか女性二人はめったに口を開いてくれず、資料をペラペラとめくっている。

芙紗子は着席をすると、まず最初に、持参してきた大き目のマスクをしなければならない。

まわりの人たちには、花粉症になったらしいのとごまかしているが、マスクをかけるのは上司からの指示なのである。

ある日上司に呼ばれて別室へいくと、

「加納さんの溜息が耳障りで仕事が手につかないと、ある人からクレームがきている」と言われた時には心の底から驚いた。芙紗子には全く自覚がなかったからだ。

いつも漠然とした不安を抱えているうえ、緊張感がまとわりついているから、無意識のうちに溜息が出ていたのかもしれない。

入社以来、別室に呼ばれて上司から注意をうけるのは初めての経験だったのでショックだった。

それ以来、毎日マスクをつけて溜息が出ないように気をつけながら仕事をしている。

「今日もまた埼京線で人身事故があったのよ」と、誰にともなく言うと、

「自殺するくらいの覚悟があれば何でもできるはずなのに、その人バカだよ」とIさんが言い放った。その言葉にIさんに初めて会った時のことが蘇ってきた。

芙紗子が「よろしくね」と、社交辞令のつもりで挨拶すると、粘り付くような目で芙紗子を見て「フン」と小さく言い、露骨にそっぽをむいたのだ。一瞬あっけにとられたが、芙紗子はよく人から、ぼおーっとしているとか、空気が読めないとか、アバウトな人間だと言われているので、その時も、半分口を開けた顔でただ呆然とするだけであった。

その時以来、Iさんの挙動にピリピリと気を遣うようになっている。

またある日、仕事中、トイレに行こうと思って椅子を引き歩きかけた途端、Iさんの椅子に足がひっかかってしまった。

「わざと大げさに私の椅子を蹴飛ばしていくなっ」と、大声でIさんが怒鳴ったのだ。

芙紗子が驚いているのと同時にN氏が

「Iさんそんなこと言うもんじゃないっ」と、普段、物静かなN氏に似合わぬ大きな声で一喝したので、Iさんは熱湯をかけられた青菜のようにシュンとしてうつむいて黙ってしまった。

芙紗子は「わざと蹴飛ばすなんて発想がどこから……」と言い返そうとした時、A氏が突然顔をあげ芙紗子の目を見て首を横に振り、黙るようにサインを送ってきたので、

芙紗子はしかたなく後の言葉を飲み込み、その場はなんとかおさまった。

Iさんは芙紗子と同じ歳で結婚歴がなく、病弱な母親と二人で暮らしているらしい。

気の毒な女性なのだと思うようにしていることで少し溜飲をさげている。

都庁での閲覧が終わると、昼食を済まし一時までに会社へもどらなければいけない。

いつもの店でランチを済ます。

パスタランチ、魚ランチ、肉ランチすべて九〇〇円、カレー、サラダ付き九五〇円と、たったの四種類しかなく、大しておいしくもない店だが、フリードリンクが付いているし、タバコも吸える。

肉ランチと魚ランチを交互に注文するので、ウェートレスが覚えていてくれて、「今日はお肉のほうですね」と、親しげに注文をとってくれる。

朝食を食べていないのに食欲がなく、毎回、三分の二ほど食べるのが精一杯である。あとは、コーヒーを飲みながらタバコを吸う。そして、ソラナックスを流し込む。精神安定剤なので少し眠くなるが、飲まないわけにはいかないのだ。

今日もなんだか憂鬱でしかたがない。その上、理由もなく不安だ。

鬱病は風邪ひきのようなもので治る病気だと言われているのに、五十年近くもこんな状態が続いているのはなぜだろう。本当に鬱病だけなのだろうか。

そんな疑問を、すがるような気持ちで、三軒目の医者にぶつけてみたことがある。

それまでの二軒の担当医は比較的若く、四〇分位の問診の後、鬱病だと診断をくだし、薬を出してくれるだけであった。その薬もいろいろと変えてくれたり、量を増やしたりしてくれてはいたが、いっこうに効果が見えてこない。

三軒目に飛び込んだ心療内科は、運よく院長が担当してくれたので、あまりにも長すぎる症状を必死で訴えてみた。院長は芙紗子の目を見据えたまま、

「あなたの場合は鬱病の中でも全般性不安障害の傾向が強いようですね。これは理由の定まらない不安や緊張が長時間続き、このような不安に心や体の症状が伴う病気です。全般性不安障害の患者さんが持つ不安や心配の原因は、ある特定のことに限定されるわけではなく、あらゆることが対象になります。家庭生活、仕事、天災、外国での戦争などあらゆることが対象になるのです」

天災や外国での戦争などあまり気にかけたことなどないのに……と、芙紗子は思ったが、院長はなおも詳しく続けてくれていた。

「全般性不安症害の患者さんが抱える不安は、持続的で程度も過剰であり、本人が思うようにコントロールできません。自分や家族に何か恐ろしいことが起きるのではないかと絶えず心配し、そわそわと落ち着かず、身震いをすることもあります」

ほぼ百パーセントその通りだと感心しながら、芙紗子はいちいち大きく頷いてみせた。

「いくら薬を飲んでも、病気のきっかけとなったストレスを受け続けている状態ではなかなかよくなりません。それに少し病状がよくなると薬をへらしたり、止めたりしたらいつまでも治りませんよ」

そして最後に、

「あなたに合う薬を出しておきますからきちんと飲み続けてください、それから、とにかくのんびりとしてくださいよ」と締めくくった。

――全般性不安障害――はじめて聞いた名前が芙紗子の五十年間を支配していたのだ。いや、以前よりも軽くはなっているものの、現在も続いている。

そういえば、小学校の通知表には毎回必ず、落ち着きがなくソワソワとしていると書かれていたし、幼稚園から二十歳を過ぎるころまで、ひどいチック症であったことは確かである。

芙紗子は一人っ子のため両親に溺愛され、兄弟同士の生存競争など知らないで育ったせいか、ぼおーっとしていて世事に疎く、苦労知らずだと言われていたので、鬱病などと言う言葉にも全く関心など示さなかったのだが、無意識のうちに心が傷ついていたのかもしれない。

二十分で食事を済ませ、会社へ戻る。乗り継ぎの駅までには地下道を十五分ほど歩かなければいけない。目を酷使したせいか、気疲れのせいか、体がだるくてしかたがない。歩を運ぶ毎に不安が少しずつ募ってくる。そして、胸の動悸が激しく打ち始め不安がピークに達した。

こめかみにピストルを当て、バアーン、そんな情景が脳裏をかすめる。

会社へ戻ってからも一言も口をきかず、紙をめくる音にもピリピリ気を使いながら仕事をし、五時のチャイムが鳴り終えるのと同時に会社を後にした。

一日の仕事を終えた安堵感もあると思うが、毎日、夕方になると朝の半分くらいに憂鬱さも不安感も軽くなっている。

「日内変動」という鬱病の特徴のひとつで、一日の中でも気分の落ち込みに変化のあることを言うらしい。多くの場合、朝に重く、夕方になると軽くなる傾向が大半である。

まったくその通りだと思う。足どりが自然と軽くなって

いることが自分でもわかるのだ。

帰路の電車の中で今夜の食事のことを考えなければならない。一人暮らしなら外食で済ますことも出来るが、息子には何かを作ってやらなければいけない。まったくめんどうくさい。ついつい出来合いの弁当を買っていく。二日続けて弁当だったから、今日も弁当にするというのはさすがに気が引ける。出来るだけ簡単に出来る物と思い、到着駅構内のスーパーマーケットでショーケースをのぞいて歩いていたら、牛肉の特売をしていたからスキヤキにすることにした。簡単に出来るうえ、我家にしては御馳走だ。ネギは一本でいい。白滝、豆腐、春菊、麩。ワリシタを買おうかどうかで迷ったが、予算が大幅にオーバーするので止めにした。関西のスキヤキは砂糖と醤油で味付けをするのでそれで充分なのだ。しめて一九二〇円。夕食は一二〇〇円以内におさえる予定でもどうしても足が出てしまう。明日は必ず一〇〇〇円以内にしよう。

自宅まで徒歩で約一五分。今日は歩くことにした。買い物で足が出た分バス代を浮かすつもりだった。

都営住宅の階段を昇る。芙紗子の部屋は最上階にあるが、朝の足どりとは別人のように気分が軽くなっていて五階まで一気に昇ることができた。

ドアをノックしてしばらく待ったが反応がない。やはり、まだ寝ているのだなと思いながらバッグの底から鍵を取り出しドアを開ける。思った通り部屋の中は真っ暗だった。電気をつけると外が暗いせいか、眩しいほど明るくなり、部屋の様子は朝出かけた時のままで何ひとつ変わっていなかった。息子は食事もせず、十二時間以上寝ていることになる。

芙紗子はベッドに倒れこむようにして手足を伸ばし、しばらく天井を見ていた。

長時間活字を見ていたせいか、目がショボショボとして、紗がかかったように天井がぼやけて見える。

熟睡しているのか、それとも帰ってきたことに気がついているのか、息子のエリアからは物音ひとつしてこない。

芙紗子はのっそり起き上がり、まず家計簿を開いた。月の半ばだというのに、今月も予算を大幅にオーバーしてしまっている。息子の引きこもりが一番の心配事だが、金がないのも頭痛の種である。

それにしても、都営住宅に当たったのは本当にラッキーだった。家賃が一万五千円というのはとても助かる。民間のアパート住まいなら、夜も働きに出なければやっていけなかっただろう。

普段着に着替え、エプロンを付けてキッチンへ行き電気を点けたが、息子の目は相変わらず閉じたままだ。狭いキッチンいっぱいに息子の布団が敷いてある上、雑誌やパソコ

ンやスポーツ新聞などが散らばっているから足の踏み場もないが、夕飯の支度をしないわけにはいかない。

米をとごうとしていると、モソモソと布団が動き、

「痛いじゃないかっ」と息子が怒鳴った。布団の上から息子の足を踏んでしまっていたらしい。

「ゴメン、足がどこにあるかわからないもん」

息子はやっと目が覚めたらしく、半身だけ起き上がり、どこか一点を見つめたままぼおーっとしている。

一ヶ月間以上風呂に入っていないから髭はボウボウに生え、髪の毛は油をかぶったようにべったりへばりついている。最近の路上生活者のほうがよほど小奇麗だ。

引きこもりが始まった当時はこれほどではなかったが、年月が経つにつれてカビが繁殖していくように身だしなみがだんだんひどくなっていき、今では手の施しようもないほど汚くなっている。

芙紗子は黙って米をとぎ続けた。

芙紗子の鬱症状も長く続いているが、なんとか日常生活はこなせている。しかし、息子の場合は鬱病の中でも強迫性障害の傾向が強いので非常に厄介なのである。

後悔先にたたずと言うが、後になって考えてみた時、いつ頃から彼が発病していたのか思い当たる節は確かにあったのだ。

幼稚園の頃、外出から帰ってきて靴を脱ぐと、その場にしゃがみこみ二十分以上も左右の靴を揃えている。

芙紗子は息子が六歳、娘が四歳の時に離婚をして以来、仕事と育児と家事に追われて絶えずイライラしていたから息子の細かい行動に気が付かず、

「ぐずぐずしないで早く上がりなさい」と、強い口調で言っていたものだ。

また、風呂嫌いの息子を叱りつけて、一週間に一度風呂へ入れるのだが三時間以上出てこない。そんな時も風呂場のドアをノックして「なにしているの、さっさと出なさい」と、何度も繰り返していた。

ずっと後になって、なぜ入浴に三時間もかかったのかという事情が判明したのだが、その当時は仕事と家事に振り回されていたとはいえ、尋常ではない息子の行動に疑問すら抱かなかった。

息子は朝ベッドから離れられないから欠席、遅刻は珍しくない。高校の第一志望の入学試験の日にも遅刻をしたため、当然のように不合格の通知を受け取るはめになった。

芙紗子は大声で怒鳴ったり、優しくなだめたりして二人の子供たちに接していた。

――ヒステリックの上、一貫性のない母親の姿勢――

息子の心の病はもちろん、芙紗子自身の心の病にも気付かず、漠然とした不安と気だるさとの戦いで精一杯だったからだとはいえ、愚かな母親であったことには違いない。

やっと第二志望の高校に入れたものの、欠席や遅刻が常習であったから、高校一年生の冬、親子で校長室に呼び出されて退学か留年を選択させられた。

後輩たちと並んで行動するという屈辱を避けたいためと、今はどうしても朝起きられないという親子同じ理由で、退学することを選んだ。

冷たい雨の降るその帰り道、二人は無言で足を運んでいた。

「ママ、ゴメンナサイ、これからは朝きちんと起きるように努力して、いつかきっと良い大学に入るから心配しないで」と、上目使いで、急に息子がポツンと言った。

芙紗子の目からは冷たい雨と同様、次から次へと涙が出て止まらなかった。一瞬だったが、無言のまま息子の手を力一杯握りしめたことは今も忘れられない。

それからは大検を受検するという名目で家に閉じこもり勉強を始めるはずであったが、机に向かっている姿を見たことがない。十五時間以上は寝ている。相変わらず風呂へ入らないから、髭面とべっとりとした髪が息子の人相の特徴になってしまった。

息子の言った言葉を信じよう。その内に行動を起こしてくれるだろう、出来るだけ黙って見守っていようと自分に言い聞かせているのだが、つい、「ママとの約束はどうなったの」とか「君は単なる怠け者なのね」などと言ってしまい、口論になることも珍しくなかった。

息子は手を挙げることはないが、壁を蹴ったり食器を割ったり大声で喚き散らすことが多くなっていった。

その頃芙紗子は、自宅から十分ほど離れた場所に、音楽スタジオを兼ねたライブハウスを経営していた。それは芙紗子の知人に癌が見つかり、やむをえず経営から手を引かざるを得なくなったのを、離婚時に得た慰謝料で芙紗子が買い取ったものであった。幸い店は繁盛していた。三十年位前のその頃はバンドブームのはしりで、町にはギターケースを抱えた長髪の若者たちがあちらこちらで見かけられる時代であった。

夕方から夜にかけて忙しくなる仕事の性格上、芙紗子の留守中、二歳年下の妹が兄の暴力の餌食になっていたことを知ったのはずっと後年になってからのことだ。

自転車で自宅と店を何回も往復しながら二人の子供たちの世話をしていたつもりであったが、夜九時頃からは店の最も忙しい時間帯であるため、自宅の様子を見に行くことが殆どなくなる。その時刻をねらって兄は妹へ壮絶ないじめを続けていたのだった。

髪の毛を引っ張って家中引きずり回したり、体中を殴ったり、布団で窒息寸前まで妹を押さえつけたりした上、

「ママに言ったら殺すぞっ」と、すごい形相で怒鳴りつけることを毎晩のように繰り返していた。

外傷がないものだから芙紗子は気付かず、夜中に帰ってきて二人の寝顔を見ながらほっとしていたという愚かで鈍感な母親であったのだ。

その事実を打ち明けたのは、妹が高校へ入学した日のことだった。

妹は芙紗子の目をじっと見つめて、その恐怖の凄まじさを涙と鼻水で顔中をくしゃくしゃにしながら母親に訴えた。そして最後に何回も自殺しようかと思ったと、付け加えた。

その時の衝撃は今でも芙紗子の心身を突き刺している。

長年の暴力を母親にも言えずに耐え抜いていた妹が不憫でならない。

芙紗子は「気づいてやれなくて本当にゴメンナサイ、ゴメンナサイ」と涙を流しながら心から謝った。

妹は無表情で母親のそんな姿を見ていたが、

「ママが死んだ後は私がお兄ちゃんの面倒をみることは覚悟しているから」とぽつんと言った。

何て子だろう。芙紗子は妹の優しさに声をあげて泣いた。母娘はあの兄のために、しばらくの間ただ泣き続けるばかりであった。

芙紗子はその次の日、妹の外出中に兄をこっぴどく叱りつけたが、

「アイツを見ているとイライラするんだ。どこかへ行けばいいのに」と、反省のかけらも見せてはいなかった。

なぜこれほどまでに妹を嫌悪するのか、今でもわからない。

息子の怠惰な引きこもりは相変わらず続いていたが、娘は毎朝早くから登校して「あの学校は私に合っている」と言い、学生生活をエンジョイしているように見えた。

ただクラブ活動の後、友達のところへ泊ることが多くなったことが心配だったが、兄の暴力から逃げていることがわかっているので、芙紗子はうるさくは言わなかった。

その内、近所の居酒屋でアルバイトを始めたので、帰宅は芙紗子とほぼ同じような時間となり、ようやく長い間の暴力から逃れることが出来たのだ。

それでも恐怖のトラウマからは逃れられないようで、「お兄ちゃんの顔を見ると震えがくる」とか「あの時の恐怖が夢に出てきてうなされて起きてしまう」と、今でも言っている。

深夜母娘が帰宅すると、昼夜反対の生活をしている息子は必ず起きていて、相手はわからないが楽しそうに電話で長話をしていることが珍しくなかった。

電話代がかさむ上、毎日の怠惰な生活態度に腹がたたな

いわけにはいかない。

毎晩のように息子との凄まじい口論が繰り返された。そんな母と兄との戦いを妹はどう感じていたのだろう。自分の部屋に閉じこもったまま出てこようとはしなかった。拾ってきた子猫だけが、娘の唯一のなぐさめだったのかも知れない。

息子が机に向かっている姿を見たことはないが、退学をして三年目にどうにか、あまり名前の知られていない大学へギリギリで入ることが出来た。

少しは勉強をしていたのかしら。それよりも、大検は一年毎の累積で合否が決められるというありがたい制度のおかげが大きいのだと思う。保健・体育の試験がどうしてもひっかかっていたのだ。

有名な大学ではないが、とにかく大学に入ることが出来たので、次の日の深夜、芙紗子としては精一杯の御馳走を並べて三人で、――おめでとう――と、ジュースで乾杯をした。

息子は「ああ、これでやっと行く所ができた」と、ほっとしたように言っていた。

学校が始まると朝五時に起き、ぐずぐずしながらも風呂へ入り登校する日が続いたので芙紗子はやっと心が軽くなり、仕事に専念出来るようになっていた。

ところが、その安堵も泡のように消えてしまった。

息子はたった三週間で「あの学校はぼくには合わない」と言って、せっかく入学出来た学校を退学してしまったのだ。

それからは以前とは質の違う本格的な引きこもりが始まった。進学という目的を失ってしまい、行き場所のなくなった息子は長期の引きこもりに入っていったのだった。

再び家から出なくなった息子は以前よりも食欲がなくなり一日中ベッドから離れず、トイレと食事以外は部屋から出てこようとしなくなった。

一日数回ほどしか顔を合わすことはないが、息子の表情はいつも暗く、母親の顔色を窺い、どこかオドオドとしている。もちろん髭は伸び放題、髪の毛はベットリとこびりついているという元の形相に戻ってしまっていた。

短期間とはいえ、大学への入学当初は朝五時に起きることが出来、風呂へ入ることも出来た。その気になればやれるのにと、芙紗子の中に腹立たしい思いが募っていくばかりであった。

たまりかねて「アルバイトでもしたら」とか「映画でも観てきたら」などと昼夜反対の生活を続ける息子に、なんとか外出させるように声をかけるのだが、ぼさぼさの髪の下から拒絶的な目でこちらを見据えて、

「あんたの言い方きついね。もっと優しく言えないのか。あんたの言いたいことは全部わかっているから放っといてくれよ。あんたのプレッシャーにビクビクしているのがわからないのかっ」と怒鳴るばかりで、くる日もくる日も部屋に閉じこもり、物音ひとつしてこない日が続いた。

芙紗子は心の中に鉛のような物を抱えながら仕事と家事をこなしていかねばならない。ニコニコ笑って優しくなどしていられないのだ。気を使いながら話しかけているつもりでも無意識の内に口調がきつくなっていたのかもしれない。それが息子にとってはプレッシャーになっていたのだろう。

その頃、娘は自宅の近くに、狭くて古いアパートを借り、アルバイトをしながら大学へ通うようになっていた。学費と家賃はなんとか出してやることは出来たが、生活費は自分で稼いでいた。学費はもちろん国の教育資金を利用しての援助ではあったが、芙紗子にとって、娘は手のかからない子供であった。

それに比べ息子はいったいどうなっているのだろう。

単なる怠け者なのか、それとも病気なのだろうか。

競馬やサッカーの中継がある時だけ部屋から出てきて、テレビの画面に向かって大声で声援をしている。そして深夜コンビニへ行き、タバコやスポーツ新聞やスナック菓子などを買ってきている。そんな様子を見ていると病気とは思えない。好きなことは出来て嫌なことはしない息子……。

結局は親に甘えているだけなのだと思うようになっていた。

いつまでこんな状態が続くのであろうか。

芙紗子の不安と焦燥は時間が経つにつれて膨れ上がっていき、息子の顔を見るたびに小言を言わずにはいられなくなっていた。その度に「あんたは何もわかっていない」と怒鳴り、壁を蹴ったり、食器を投げたりすることが珍しいことではなくなった。

芙紗子は絶えず憂鬱で体がだるく、何をする気力も失せて、日に日に家事がおろそかになっていった。

食べっぱなしの食器がキッチンに積み上げられ、あちこちにゴミが散らばり、部屋に埃が積もるような状態が続くと心がくすんでくる。片付けと心の透明度には相互関係あるのはまちがいない。

明日こそは大掃除をしようと決心するのだが、体が思うように動かず一日のばしにしてしまう。焦りばかりが先走り罪悪感にさいなまれる日が続き、時間があれば散らかったままの部屋のベッドに横たわることが日常となってしまっていた。

それでも仕事をしないわけにはいかない。その仕事も逼迫していた。五年位前から押し寄せていたバンドブームの

衰退にスタジオの老朽化が加わり、客足は年々低下していく一方である。それでもアルバイトの学生には給料を支払わなければいけないから、二年間赤字経営が続いていた。国や都からの企業資金の融資をうけながら青息吐息でなんとか持ちこたえているという状態にあったのだ。

ミュージシャンたちは新しい機材に敏感だから、機材を刷新すると口コミで足を運んでくれるに違いないと思い、最新式の高価な機材を購入した上、大学や高校や音楽専門学校の校門前でチラシを配ったり、音楽の専門誌に広告を載せたり、看板に奇抜なネオンをつけたりして必死で再起をはかってみたが、バンド人口の減少とオンボロスタジオという現実には勝てず、客は減るばかりであった。反対に借金は増える一方である。

五日間、客が一組という日が続いた時、やっと諦めがつき、二十年間なんとか持ちこたえてきたスタジオを閉めることを決意した。

その瞬間、どういうわけかほっとしたのを今でも覚えている。

息子の引きこもりと、仕事の破綻、その上多額の借金を抱えてしまった芙紗子は、足の踏み場もないほど散らかった家の中に引きこもって眠ってばかりいた。いや、眠っていたのではない。目を閉じながら不安にさいなまれていたのだ。

このまま明日が来なければいいのにと願いながら何回も寝返りを打ち目を閉じていた。

――自己破産――以前から芙紗子の頭の中に時々顔を出しては消えていっていたシルエットがくっきりと目の前にその姿を現した。

やはりそれしかない……。

何回目かの寝返りを打った瞬間、苦渋の選択にピリオドが打たれたのだ。

早速、芙紗子は息子と娘の前でその決意を打ち明けた。

「そんな不名誉なことはやめてくれ、ぼくがなんとかするから」

「なんとかすると言っても君働いてくれるの。百万円や二百万円の借金じゃないのよ。桁が違うのよ」

「その気になればなんとか出来るよ」

「じゃー、今まではなんだったの。それじゃ単なる怠け者と思われてもしかたないじゃないの。行動もできないくせに何を言っているの」

「ああ、なんとでも言ってくれ。とにかくぼくは絶対に反対だから」

と言い捨て、机を力一杯に叩いて部屋へ入っていくばかりだ。二人の口論を不機嫌な表情で聞いていた娘は、

「自己破産、別にいいじゃん、人生いろいろなんだから」

と、けろっとしたものである。

――人生いろいろ――その一言に芙紗子は一瞬、一服の清涼剤を飲んだように胸のつかえが下りたような気持になったが、自分の人生に刻まれた大きな汚点であることには違いなかった。

その後、知人の弁護士の勧めもあって、以前は他人事のように思っていた自己破産に踏み切ったのだった。

――一家離散――我家もとうとう、自己破産者にとってお定まりの生活コースを辿りはじめることになってしまった。

芙紗子は知人の紹介してくれた地方の法律事務所の事務員としての職を得て東京を離れることになり、その頃社会人になっていた娘は、給料だけでなんとか生活出来るだけのめどがついていたが、問題は息子である。

引きこもり息子を地方まで連れて行くわけにはいかない。

芙紗子は友人から金を借りて、息子にアパート代と二ヶ月分位の生活費を渡し、

「早く働き口を見つけて自立してね。もうどうしようもないのだから。これが自立出来る機会かもしれないと思えば君にとってかえってよかったのかも知れないよ」

あれほど自己破産に反対していた息子も、弁護士の説得が功を奏したのか、観念したような表情で意外にも素直に金を受け取り、

「これしか方法がないのならしかたがないじゃん。とにかく頑張ってみるよ」と、力のない声で言い残して芙紗子の前から去っていった。

法律事務所の事務員としての仕事は非常に煩雑で難しい内容であったが、自宅へ帰ってからも法律書などを読み漁り、先輩たちよりも遅いながらも、なんとか大きなミスもしないで仕事をこなすことが出来た。

しかし、地方は車社会であるのが、運転の出来ない芙紗子にとっては致命傷であった。自転車に乗っている人などまったく見かけない。ペダルを漕いでいる芙紗子の横を、車がスイスイと追い越していく。それでも、春から秋の半ばまでは用が足りるのだが、雪がぱらつき始める頃になるとそうはいかなくなってしまう。

日本屈指の雪国であるその地方には早くから雪が降り始め、冬になると驚くほどの雪が積もるのである。

都会では見たこともないようなサラサラとした雪が人の背丈以上に積もる。テレビや映画の中でしか観たことのない世界であった。

除雪をしてあるといっても、道路がアイスバーンになっているので自転車など乗っていられない。

芙紗子は朝早く起き、雪国独特の大きなブーツをはい

て、一時間以上かかる道を歩いて事務所まで通っていた。
踏みしめるたびにキュッキュッと雪が鳴る。火照った頬に冷たい風が気持よかった。
気をつけて歩いているつもりでも、毎日のように足を滑らし、肘や腰を打ってしまう。そのあまりの痛さに涙を流すこともあった。白一色の世界の中で、たった独りうずくまって涙を流していると、こんな身に落ちぶれてしまったという惨めさが押し寄せてきて、都落ちという言葉が思い浮かんでくるのであった。

東京に住む子供たちからは殆ど連絡がなかった。芙紗子は仕事に慣れるのが精一杯の状態にあったので、出来るだけ子供たちのことは考えないようにしていた。
どうにかやっているのだろう。親への甘えが大きな原因と思われる引きこもりの息子にとってはよかったのかも知れない。あの路上生活者のような姿を見ないだけでもよしとしようと、自分に言い聞かせながらも、どういうわけか、ひどく重いものが心にまとわりついているのを常に感じていた。
十ヶ月ほど過ぎた頃だろうか、息子のアパートの大家から家賃滞納の連絡があったのだ。アパートへ入居の時の保証人になっていたためである。
芙紗子は早速息子に電話をかけ、

「どうなっているの、働いているんでしょう。給料で家賃払えないの、いったい何に使っているの」
「働いているよ。あの大家グタグタとうるさくてしかたがないんだ。他にも滞納している奴がいっぱいいるんだからほっといていいよ」
「そういうわけにはいかないでしょう。追い出されてしまうわよ。せっかく安いところを見つけたのに」
「じゃー、どうすればいいんだ。ぼくは払えないからほっておくしかないよ」
「本当に働いているの」
「働いているよ。給料安いから家賃まで手が回らないんだ」
「いったい、いくらもらっているの」
「十万円いくかいかないか位だよ」と答えた声が小さくなっている。
「まさかそんなはずはないでしょう」
「本当だよ。そんなに疑うんなら明細書を送ろうか」
「もっと給料のいいところへ移ったら」
「うん……」と言った口調が弱弱しく、ますます声が小さくなっていた。
何かある……。
芙紗子は薄れかけていた不安が再び頭を持ち上げてくるのを感じた。
追い出されでもしたら、あの息子のことだから母親の元

へ転がり込んで来るに違いない。芙紗子は家賃の滞納分を振り込まざるを得なかった。
その後も大家からの催促が続くようになり、芙紗子の腹立ちと不安は膨れ上がっていくばかりだった。
「本当のことを言ってよ。きちんと働いていたら十万円なんてことないでしょう。もう絶対に振り込まないからね。追い出されてももう関係ないから。住み込みの働き口でも探したらどう」
「……」
「いい年して、親に甘えるのもいいかげんにしてよ。こちらへ来ても絶対に入れませんからね」
「……」
「なんとか言ったらどうなのっ」
「……あのー、実は、しょっちゅう会社を休むので給料が少ないんです……。体がだるくてだるくて何をする気力も起こらないんで寝てばかりいるから自分でもあきれているくらいなんです」
受話器を通してオドオドしている様子が伝わってくる。
「要するに、この期に及んでも相変わらずの引きこもりっていうわけなのね」
「やる気はあるのだけど、どうしても体がついていかないんです。これ本当のことだから……。怠けているわけじゃないんだから……、信じてくれよ」

「そんなに体がだるいのだったら一度医者へ行ってみたら」
「そんな金ありませんよ」
「必ず医者へ行くと約束してくれるのならお金を振り込みます。とにかく絶対に医者へ行くことを約束して」
「自分でも罪悪感で夜中にうなされる位だから必ず行きますよ」
いったい何だっていうの。またお金がいるじゃない。一文無しになった親が地方の安月給でカツカツの生活をしているというのに……。一人前の大人が相変わらず半分引きこもっているなんて、全くしょうがない息子っ。
やり場のない憤懣を心の中に吐き出しながら、芙紗子は事務所とアパートを往復するだけの毎日を過ごしていた。せっかく地方へ来ているというのに、観光などしている金銭的な余裕などない上、足もない。せいぜいビデオを借りてきて名画を観たり、読書をするのだけが芙紗子の娯楽であった。
やはり、まわりの人たちが忠告するように、息子との縁を切ってしまったほうがいいのかも知れない。
東京にいた頃、引きこもりの悩みを友人たちに打ち明けていた。
男性も女性もまるで申し合わせたように
「あなたが甘やかせて育てたのが悪いのよ。要するに単なる甘えね。今、突き放さなくてはキリがないわよ。そのほ

うが息子さんのためになるのよ。死のうとホームレスになろうと覚悟をして追い出したほうがいい。心を鬼にしてそうしなければ芙紗子さんが彼の一生を潰してしまうことになる。独りになれば息子さんは何とかするしかないんだから」

異口同音にそう忠告してくれていたのだ。

最も賢明な答えである。芙紗子も友人に相談を受けていたら同じように答えていたであろう。しかし、頭の中では納得していても、息子が路頭に迷っている姿を想像したら、どうしても踏ん切りがつかず、心を鬼には出来なかった。それ以上に、息子が妹を頼って行き、娘に迷惑を及ぼすことを避けたいという理由のほうが何よりも大きく、芙紗子がガード役を退くわけにはいかなかったのだ。

「鬱病と強迫性障害という病気だと言われた」

受話器を通して息子は自分の病名を告げてきた。

「強・迫・性・障・害？　それどういう病気？」

「一口には言えないけど、要するに、わかっているのにやめられない。ある行動を繰り返さないと気がすまないという厄介な病気なんだ。だからひとつのことをやり終えるのに普通の人には考えられないほど時間がかかるという病気だと先生は言っていた。それにぼくの場合鬱病もあるんだって」

幼稚園の頃から外から帰って来ると、玄関にしゃがみ込み、脱いだ靴を二十分以上もかかって左右揃えている。風呂へ入るのに三時間以上もかかる。目が覚めているのに起き上がれない。一つのことをするのに長時間かかる……。

思い当たることが次から次へと頭に浮かんできた。

それらは全部、強迫性障害という、初めて耳にする病気のせいだったのだろうか。その上に鬱病だなんて。

芙紗子は言うべき言葉が見つからなかった。

「……」

「もしもし、聞いている？　ぼく図書館へ行って調べてみたらその病気の症状が全部ぼくのと一緒だったので驚いてしまったくらいだ。本当なんだよ」

自分は決して怠けているわけではなく、病気のせいなのだったのだという大義名分が出来たせいか、息子の声には、以前と違いおどおどとしたところはなくなっていた。

「それで、その病気は治ると先生は言っていたの？」

「はっきりとは言っていないが、薬を出してくれたから少しずつよくなるんじゃないかなあ」

「薬だけはきちんと飲んでよ、絶対だよ、約束して」

「自分でもどうしようもなくて、これでも毎日悩んでいたくらいだからもちろんきちんと飲むよ。そのかわり金は出してくれよ」

「きちんと飲んでくれるのなら出しますよ」

また金が要る。どこまで行っても金のかかる息子である。

早速、芙紗子は強迫性障害と鬱病に関する本を買ってきて読み漁った。

色んな症状が羅列されていたが一口で言うと、強迫性障害というのは、やめたい（自我違和感）、意味がない、ばかげているとわかっていながら、ある考えが頭から離れず、ある行動を繰り返さないと気が済まないという厄介な病気であり、一方鬱病のほうは、憂鬱でやる気が出なく、何に対しても興味が持てない。そしていつも体がだるいなど多くの症状が記されていた。

どちらも放っておくと日常生活や社会生活に支障をきたすため、早期発見が大切だと書かれていて、家族の対応としては患者自身が苦しんでいるので充分理解を示すことと締めくくられていた。

日常生活や社会生活に支障をきたす……。

そのとおりである。息子は日常生活にも社会生活にも充分すぎるほど支障をきたしている。

そんなに苦しんでいるようには見えなかったが、引きこもりは心の病気のせいだったのだろうか。

思わぬ展開に、芙紗子はどういうわけか、心がほんの少し軽くなっていくのを覚えた。どうしようもない怠け者の息子という烙印よりは、病気のせいだったと思えるほうが、育て方が間違っていたという自責の念から少し遠ざかることが出来るからかも知れない。

その後も家賃と病院代は毎月振り込んでいたが、

「体がだるくてだるくて動けないから今月は殆ど収入がないんだ。三日間何も食べていない」などと、消え入りそうな声で言ってくるようになってきた。

その都度芙紗子は金を振り込まざるを得なかった。

解雇されたのに違いないと思ったが、そのことを尋ねると、息子は声を荒げて働いていると言い張るばかりであった。

お金を渡すのも、離れて暮らしている今の状況では、家族が理解を示すという鬱病患者に対する接し方の一環であると思うよりしかたがなかったのだった。

出来るだけ切り詰めながら、事務所と自宅との往復を続けるだけの毎日であったが、所長が衆議院議員に当選したため法律事務所を縮小することになり、芙紗子は東京へ戻ることになった。

約三年間の雪国暮らしであった。

どこにいても似たようなことはあるが、特に噂話ばかりに終始する事務所の人たちとはどうしてもフィーリングが合わず、楽しい思い出などなかったので、芙紗子は帰京出来ることが嬉しかった。

とりあえず、娘のアパートに身を寄せて住む所を探すこ

とにした。

久し振りに見る娘は化粧をしているせいか、以前より美しく見えた。学生時代から居酒屋でアルバイトをしていたので酒に強く、酔っ払って夜中に帰宅することが珍しくなかったが、少ない睡眠でも遅刻することなくきちんと出勤していた。

「いい男がいっぱいいるんだ」などと言い、国会議員秘書という職業をエンジョイしている様子に、芙紗子は心から安心出来たが、問題は息子のことである。

友人の紹介で格安のアパートを見つけることが出来たものの、新しい住所を知らせないでこのまま自立を続けさせようか。家へ入れると根がはえたようにまた引きこもってしまう可能性は限りなく大きい。だが、現在も自立しているとはとても言えない状況である。物理的に距離を置いているというだけで、実情は、親の金で生きている引きこもり息子には違いないのだ。

このまま別居を続ければ、芙紗子は二世帯分の生活費を稼がなければいけないことになる。

どこまでいっても厄介な息子である。

ファミリーレストランで会った時、髭と髪の毛は伸び放題ではなかったものの、あまりにも痩せてしまっていた息子の変貌には息を飲んだくらいだ。目はうつろで覇気など全く見当たらず、やはり鬱病そのものであった。

――やはり入れるしかない――

芙紗子は迷っていた気持ちにピリオドを打たざるを得なかった。

とにかく病気を治さなければ……。

それに都会での二世帯分の家賃などとても払えない。

「けっこう明るくていい所じゃん。ぼくのところは狭くて足も充分伸ばせなかったのでこれで久しぶりに足を伸ばして眠れるよ」などと呑気なことを言いながら、芙紗子の新しい住まいに当然のような顔で息子が入り込んできた。いや、芙紗子がとうとう入れてしまったのだった。

新聞の求人広告を見て芙紗子は現在の会社に職を得ることが出来た。五十歳から六十五歳までという年齢制限が自分に合っていた上、文章を書く仕事であるらしいことから、必死で受かることを願った。定年退職をした応募者が大半を占めており競争率は十八倍であったが、運が味方をしてくれたのか、五十七歳で再就職が叶ったわけである。もちろん正社員ではなく嘱託社員というかなり不利なポジションではあったが、年齢から考えてもそれはしかたがないことだと思えた。

息子は薬だけはきちんと飲んでいたが、いっこうに改善の様子が見えず、再び以前の小汚い引きこもりに戻ってしまっていた。

医者を代えたり薬を変えたり量を増やしたりしていたが、相変わらず無気力で、一日の大半をベッドで過ごしている日が続いていた。ただひとつ違っていたのは時々、ベッドの中から楽しそうな笑い声が聞こえてくるようになっていたことである。

日頃から「ぼくのことにはいっさい干渉しないでほしい。放っといてくれるのがいちばんの治療法なのだから」と言われているので、食事を作る以外には出来るだけ立ち入らないようにしているつもりなのだが、いつまでたっても動こうとしない息子がどうしても気になってしまう。機嫌のいい時を見計らって、

「誰と楽しそうに話をしているの」と聞いてみた。

「彼女とだよ」

あまりにもあっさりとした返事に、一瞬とまどったが、嬉しい気持ちもあった。

変化が起きていたのが嬉しかったのだ。

働いていた会社で知り合ったのだと言う。

「三歳の時から施設で育ったのですごく暗い感じの娘なんだ。高校二年生の時に父親の再婚先に引き取られたが、継母にいじめられているから居場所がないんだって。食事も作ってくれないので自分の分はひとりで作っているんだって、可哀そうなんだよ」

息子は饒舌になっていた

「母親はどこかにいるらしいのでもう少ししたらぼくと二人で母親を探しにいくことにしているんだ」とも付け加えた。

「その娘、きれいなの」

「うーん、そうだな、小泉今日子をもうちょっと美人にしたような感じかな。洋子っていう名前だよ。写真見たいか」と嬉しそうに言って携帯で撮った写真を見せてくれた。

芙紗子の想像していたよりは美しい、目のパッチリとした相当の美人だった。

「すごいじゃん、この娘もてるでしょう」

芙紗子も嬉しくなって声をはずませていた。

「誘ってくる奴はものすごくいるらしいが、健康的な普通の奴ばかりなので、全然話が合わないんだって」

同病相哀れむという関係なのだなと、芙紗子は思った。

電話で話していることが殆どだが、月に一、二回はデートに出掛ける。その時には風呂に入り髭も剃って行くので芙紗子はしぶしぶ金を渡す。路上生活者のような風貌で部屋に閉じこもっていられるよりはよほどましだからである。とにかく太陽の光を浴びてくれるだけでもありがたかった。

芙紗子は、彼女が出来たことによって息子が徐々に変わっていってくれることを心より願っていた。

好きなことだけはできてそれ以外は閉じこもっている。そんな息子を見ていると、本当に鬱病なのだろうかと疑問が心を掠めるが、食欲もなく、一日中だるそうにしている様子にやはり尋常ではないものを感じてしまう。

強迫性障害の傾向が強いと診断されているが、息子の場合どういうことに拘っているのか具体的にはわからない。芙紗子は息子の顔色を窺いながら、

「本を読んで私も強迫性障害について調べてみたの。一口に言えば、意味がないからやめたいと思っていてもやらずにはいられない病気だと書かれてあったが、君の場合何に拘っているの」と、聞いてみた。

「そんなの色々だよ。普通の人には理解できないと思うよ」と、前置きしながらとつとつと話し出してくれた。

「ぼく風呂へ入るのが死ぬほど嫌なんだ。風呂の中でやらなければいけないことがいっぱいあるのでくたくたになってしまうからどうしても入りたくなくなるんだ」

「例えばシャンプーで頭を一五一回こする、途中で数を間違えるとまた最初からやり直す。風呂のまわりを一五九回撫ぜる。これもまた途中で数を忘れてしまうと初めからやり直す。その他色々やらなければ気持が悪くてしかたがないことばかりだからどうしても入りたくなくなるんだ。考えられないでしょう。これ強迫儀式と言うんだって」

「朝、起きられないのも目が覚めてから枕を何回も裏返したり、ベッドのまわりを何回も何回もこすらないとどうしても気が済まないから起き上がれないんだよ」

その他色々な儀式をやっているのだと言う。

風呂へ入らないのも、朝、起き上がれないのも奇妙な病気のせいなのだったのだと今になって芙紗子はやっと納得することができた。

「患者は必ず隠れて儀式を行うから誰も気がつかない。ぼくの場合はどういうわけか奇数ばかりだが偶数の人もいるんだ」

「薬のおかげでこれでもいくらか楽になったほうだが前はもっとひどかったんだよ」と付け加えた。

本当に変な病気である。息子の場合それに鬱病が重なっているからなお厄介である。

「あんたも普通じゃないよ。いつもイライラしているし先の先のことまで心配ばかりしている。そして年がら年中、体がだるいだるいと言っているじゃないか。いちどぼくが行っている医者に行ってみたら。親がゆったりとしているとぼくの心も安まるのだから。頼むから行ってくれよ、あんたみたいなおばさんがいっぱい来ているよ。絶対に行ってくれよな」

親がゆったりしていると息子の心が休まる……。

芙紗子にとってその一言は大きかった。それにいつも不安でイライラしていて体がだるくてしかたがないのは事実である。

芙紗子は息子と同じ心療内科を訪れることにした。芙紗子にとっては一件目の医者だった。心を病んでいる人がこんなにも多いのかと思われるほど待合室は人で溢れていたが、どの人も一見正常に見える。

一時間以上待たされた後、第一診察室というところに通され、専門家による四〇分くらいの問診で、成育歴から両親のこと、そして現在の症状のことなど多くのことを聞かれた後、医者のいる第二診察室へと回された。

年配の医者を想像していたが、神経質そうな若い医者がさきほどの問診の書類を見ながら、パソコンを前にして座っていたのが意外だった。

「内科的にどこか悪いところがありますか」

「いつも不安だというのはなにか心配事があるからですか」など簡単な質問をした後、

「薬を二週間分出しておきますから飲んでみて下さい。飲んでみて調子が悪くなるようでしたら電話でもいいからすぐに連絡して下さい」と、パソコンを打ちながら若い医者は事務的な口調で言った。患者を診慣れているからかも知れないが、なにか物足らず、拍子抜けした芙紗子は、

「どこが悪いのですか。病名はなんですか」と尋ねずにはいられなかった。

「ひどくはないけど鬱病ですね。薬を飲みながら様子を見ていきましょう」

親子で鬱病だなんて……。

芙紗子は心療内科からの帰路、駅前のベンチに腰をかけて心の中で呟いていた。目の前の噴水が水を噴き上げて青空へ散っていく。行き交う人たちはどの人も健康そうに見える。病院の待合室にいた人たちも健康そうに見えたが、皆、目には見えない病を抱えているはずなのだ。

人の内情など見た目にはわからない。特に心の病など異常な行動として現れない限り誰にもわかるはずがない。今日、思い切って心療内科を訪れたのはよかったかも知れない。もし息子の勧めがなかったら、不安と体のだるさを抱えたまま一生過ごしていたかも知れない。

今日からきちんと薬を飲み続けたら少しずつ良くなっていくに違いない。そうなればどんなに楽だろう。

厄介な病名を告げられたにも拘わらず、芙紗子の心の中は憑き物が落ちたように、どこかすっきりとした気持になっていたのだった。

芙紗子は仕事だけはおろそかにしないで順調にこなしていたものの、家事は手抜きをし、相変わらず家の中は汚く散らかっていた。

そんな中での生活は、心がざわつき、罪悪感にさいなまれるのだが、どうしてもやる気が起こらない。しかし、鬱病のせいなのだという都合のいい口実が出来たことで、以

前ほど自分を責めることが少なくなっていったのは確かである。

薬が効いているのかいないのかわからない。少し体のだるさと不安感が薬になったような気もするし、なっていないような気もする。息子も同じことを言っている。三年くらいの間に医者を代えたり薬を変えたりしてみたが、顕著な効果は見えてこなかった。

親子共に薬がきれても病院へ行くのが億劫になってしまい、きちんと飲んでいた習慣が次第におろそかになってしまうという悪循環が続くようになったのだ。

息子は相変わらず働かずに部屋に閉じこもっている。そして携帯電話で彼女と長話をし、月に一、二回デートに出掛けるという生活を送っていた。

病気のせいだからしかたがないと思いながらも、自分の体調が悪い時などは特に、息子の生活態度に腹が立ってくるのを抑えきれなくなってしまうのだ。

「デートが出来るくらいの元気があれば働けないことはないじゃない。朝が弱いんなら夜の仕事を探せば。週に二、三回でも一日に二、三時間でもいいから働いてみてよ。そんなアルバイトならどこでも募集しているよ」

「このままではいけないことはわかっているよ。だからこうして求人誌を買ってきて見ているじゃないか」

息子は部屋の片隅に積み上げられた求人誌を指さして見せた。

「そんなに見ていてどこもないなんてはずはないでしょう。本当に働く気はあるの。こんな人生でいいの」

「いいはずないじゃないかっ」と、大声で怒鳴った後、

「近い内に面接に行くことになっているから……。あんたにギャーギャー言われるのがどんなにプレッシャーになっているか。あんたが言えば言うほど逆効果になっているのがまだわからないのかっ」

そんな言い争いを何回繰り返したであろうか。

その内、時々抑えきれなくなってしまう芙紗子の怒りに、息子はしぶしぶアルバイトに出掛けるようになったが、三週間くらいで辞めてしまう。クビになるのか、自分から辞めるのか一切話をしてくれないが、長くて二ヶ月続くのが関の山であった。

結局、五回ほどアルバイトらしきものをやっていたが、その後はずーっと引きこもりを続けるようになってしまっていた。

ある日、部屋からのっそり出てきて、

「彼女に電話しているんだが三日間ぜんぜんつながらないんだ。どうしよう」とおろおろしている。

「実家にかけてみたら」

「あそこの家、彼女のことなど眼中にないから知らないと言うだけだよ」

「彼女、今、ひとり暮らしなんでしょう、じゃあ様子を見に行きなさいよ」

「今日中につながらなかったら明日の朝行ってみるよ」

「でも今日中に行ったほうがいいんじゃない、病気で倒れているかも知れないし」

「とにかく実家に電話だけしてみるよ」

息子が彼女の実家に電話をしてから二時間ほど経った頃、玄関にある家の電話のベルがけたたましく響いた。飛ぶようにして受話器をとった息子の口から「あああああ、やっぱり！」と言う悲鳴が聞こえてきた。

「どうしたの？」

「……」

「何かあったの」

「……自殺したんだって……」声がうわずっている。

「ええっ」

「家の中で首をつっていたんだって……」

「ええっ、首・つ・り」

息子はガクッと膝を折りその場にひれ伏し、

「あああああ、あああああ」と獣が呻くような声を出していたが、

「すぐに行ってみる」と言って立ち上がり、髭も剃らずにジーンズに足を通していた。

「タクシーで行きなさいっ」

芙紗子はすばやく一万円札を手渡した。それを鷲掴みにして息子は飛び出して行ったのだ。

芙紗子の目から涙が溢れ出してきた。

実母の顔を知らない施設育ちの上、継母にいじめられて、行き場所のなかった洋子という女の子。

美人で若く、暗い感じのする、わずか二十三歳の洋子という女の子……。

それくらいしか聞いていないが、その薄幸だった半生を思うといつまでも涙が止まらなかった。

次の日は日曜日だったので芙紗子はベッドの中でいつまでも横たわっていた。いや、何時間も何時間もぼおーっと天井を見つめていたのだ。

昼頃、息子がひっそりと戻ってきて、無言のまま自分の部屋へ入っていった。芙紗子は色々と聞きたいことがあったが、声を掛けずにそっとしておいた。

物音ひとつしてこないことが気になってしかたがなく落ち着かなかった。深夜になっても姿を現さないので「まさか後追い……」という考えが浮かびはじめ、ノックをしようかどうか迷っていた矢先、息子がぬっと姿を現した。

芙紗子の前に座り込み、

「あそこの家族ダメだ、何だあの家族。涙を流している奴など誰もいないんだぜ。泣いているのはぼくだけだよ」

「……そう」

「ことがことだけに通夜も葬儀もしないんだって」

「死ぬ前の夜、彼女から電話があって会いたいからすぐ来て欲しいと言われたんだが、ぼく体がだるかったから明日にしてくれと言ったんだ。あの時行っていればこんなことにならなかったんだ。ぼくが殺したんだよ。一生十字架を背負って生きて行くしかないんだっ」と言った途端、畳に肘をつき、大粒の涙と鼻水を垂らし顔をくしゃくしゃにして号泣しはじめた。泣き崩れている姿を芙紗子は身の凍る思いで見つめていた。そんな息子の姿を見るのは初めてだった。

芙紗子は葬儀もしてもらえない彼女が不憫でならなかった。なんと幸薄い女の子だっただろう。一度会いたかった……。

芙紗子の目からも涙が溢れ出て二人で泣き続けていた。

それからの息子は部屋に閉じこもったまま出てこようとはしない上、食事も摂らなかった。姿を見るのはトイレに行く時くらいである。魂が抜けたようなと言う表現はこういうことを指すのであろうか、全身が虚ろで夢遊病者のように足元がおぼつかない。

「何か食べないと……」と、遠慮がちに声をかけみるのだが、何の反応も示さないで部屋へ戻って行く。

芙紗子は、彼女のことは一生口にしまいと心に決めていた。息子の傷口に触れることはタブーだ。時間が癒してくれるのを待つしか術はない。

しかし、いくら時間が経っても息子は痩せていくばかりで、精気を抜きとられた人間のようになっていた。

芙紗子は、かかり付けの医者に一部始終を打ち明けて入院をほのめかしてみた。幸い親子で同じ医院に罹っていたので医者は息子の症状を把握している。

「じゃあ、紹介状を書きますから一度行ってみますか」というあっさりとした返事に、芙紗子は物足りなさを感じずにはいられなかった。

「入院をしたら快くなります。入院をさせるべきです」という返事を期待していたのに……。

絶対、嫌がるに違いないと思いながらも、芙紗子は入院することを息子に切り出した。

「もう疲れた。どうでもいいや。あんたの好きなようにしたら」と、捨て鉢な口調で息子は弱弱しく言った。

次の朝、途中で気が変わらないことを祈りながら、タクシーを奮発して二人は紹介状にあった新宿の○○病院の門をくぐったのである。

そこは古臭いこじんまりとした建物であったが、昔から権威のある精神病院であると聞いている。二人は今までの経緯を必死で説明し、入院すれば少しは病状が改善するのかどうかを尋ねてみた。息子はぽつぽつと話をしているだけなので、芙紗子はじれったくって口を挟みたい思いに駆られたが、医者は息子のほうばかりを見て話を聞いていた。

「一日中動かずのんびりとして見えるので、私には怠けているように思える時があるのですが」

芙紗子はそれだけはどうしても伝えたかった。

「大抵の家族の方はそう言われますが、本人の心の中は嵐が吹いているようにとても忙しいのです」

息子はうんうんと大きく頷いている。

「入院したからといって奇跡的に治るものではありませんが、気休めのつもりで三週間ほど入院してみますか」

無責任とも思えるようなことを医者は淡々と言った。

「でも、ここでは三時間も風呂へ入っているようなことは出来ませんよ」と、半分笑いながら付け加えた。

「とにかくどういうところか見学して行って下さい」

看護婦らしい女性の案内で薄暗い長い廊下を通り二人はそっと病室へ足を踏み入れた。

そこは廊下よりもなお薄暗く、体育館を少し小さくしたような部屋に五十床くらいのベッドが何列かに分けられて並んでいて、大勢の男性たちがベッドに横たわっていた。

睡眠薬のせいか、病気のせいかわからないが、大抵の人は目を閉じていた。中には虚ろな目で天井の一点を見つめている人もいた。

音のない静寂の中で、ベッドに横たわっているだけの光景は薄寒く索漠とした空気が漂っていた。息子は一歩一歩足を運びながら寝顔を覗いていたが、何を思っていたのだろう。部屋には何もない。もちろんカーテンもないので、部屋全体が大きな霊安室を彷彿させた。

帰りの廊下に何人かの男性が長椅子に腰をかけていた。一点を見つめたままじっとしている人。絶え間なく独り言を言っている人。中にはさかんに首を振っている人などがいて、芙紗子は以前観た精神病院を舞台にした映画を思い出していた。

さきほどの医者のところへ戻ると、

「どうでしたか?」と、尋ねられたが、適当な言葉が見つからなかった。息子も黙っている。

「とにかくよく考えて近い内にもう一度来てください」と言われ、「入院したら徐々に快くなります」という期待していた言葉のかけらも聞けないままに病院を後にしたのであった。

無言で歩いていると、

「……やっぱり嫌だよ」息子がぽつんと言った。

「……そうね」

快くなる保証がないまま、今見てきたばかりのベッドで眠り続けている息子の姿を想像すると、大きな抵抗を感じずにはいられなかったのだ。

結局、親子で薬を飲みながら、今まで通りの生活を続けていくより術はなかった。

そんな生活の中にも、ひとつだけラッキーと思われるようなことが飛び込んできた。

以前から申し込んでいた都営住宅にとうとう当たることが出来たのだ。七回目の挑戦での結果だった。引きこもり息子を抱えての生活は経済面だけでも非常に厳しかった。これで一息つける。

しかし、高齢の単身者用のスペースなので非常に狭い。息子にはキッチンで寝てもらうよりしかたがなかった。

ベッドは嵩高いので、六畳ほどのフローリングに布団を敷いて、芙紗子はその片隅で布団を踏まないように気をつけながら炊事をするという不自由な生活が始まった。

その頃には、すでに娘は結婚して一児の母になっていたので、孫の子守を口実にして娘の家に行き、息詰まるような狭いアパートから避難することが多くなっていた。

しかし、娘の新居は広いものの、しっかり者だが気のきつい娘との言い争いが続くようになり、子守を頼まれた時以外は次第に足が遠のいていったのだ。

何の改善もないまま時間ばかりが過ぎていく。母親は還暦を過ぎ、息子は三十歳を越していた。

いつまでこんな日が続くのであろうか……。

一生かもしれない……。

芙紗子はいつの頃からか、心の底から笑うことを忘れてしまっていたことに気がついた。

ある日、なにげなく区の広報に目を通していると、「引きこもりを持つ親の会」というのが今春から発足すると出ていたので早速申し込んだ。

二十畳くらいの会議室には芙紗子を含めて七人の出席者と、女性ばかり五人の福祉課の職員が顔を並べていた。

親たちは必死で家庭内での現状を伝えている。親に暴力をふるう。昼夜逆転の生活。一歩も外へ出ない。暴れて食器などを壊す。病院へ行くことを拒絶するなど似たような体験が語られていたが、十代や二十代の息子や娘たちを持つ親ばかりで、息子が三十歳を過ぎているのは芙紗子だけであった。中年のおじさんとも言える息子のことを話すのが恥ずかしく思えたが、芙紗子は最後に「親の育て方が悪かったせいでしょうか」と一番聞きたかった事を質問した。

「いいえ、そんなことはありません」と、最もベテランらしい年配の職員が断言してくれたので、少し救われた気がしたのだ。

二時間という限られた時間内での相談会は物足りなく解

決にはほど遠いものであったが、来月都庁で開催される大規模な「引きこもりを持つ親の会」のパンフレットを貰えたことだけがその日の収穫であった。

都庁で開かれたその会には立ち見席が出るほど大勢の人たちが詰め掛けていた。

鬱病と引きこもりやニートが社会問題になったのは比較的最近のことであろう。

ＮＨＫ福祉ネットワークによると完全な引きこもりは一六〇万人、まれに外へ出る人は三〇〇万人を超し、男性が約七〇パーセントを占めているという。イタリアでも目立ってきており、多くの先進国で存在すると見られることから、グローバリゼーションによる競争激化が原因ではないかと見るむきもある。そして、引きこもりの高齢化と長期化が目立ち平均年齢は三十歳を超えている。と、パンフレットの冒頭に書かれていた。

壇上には精神保健の専門家やＮＰＯ法人の若年者支援事業部の人たちなど四人のパネリストがそれぞれの見解を述べるのであるが、戦後の社会の在り方がひとつの要因になっていることを異口同音ながら口にしていたのが印象的であった。

近代工業化による社会のつくり、すなわちスピード化を重視するため「早くしなさい」と言う。また、生産性の奨励のため「頑張りなさい」と言う。

管理化の強化「しっかりしなさい」、画一化の促進「みんなと同じように」と意識付けてしまう。その結果、自分らしさを見失ってしまい、結果として思春期が間延びしてしまい、不安にさいなまれる思春期が長期化し、ストレスがたまり、子供を無意識に追いつめてしまっている。

芙紗子の息子と同様、強迫性障害や発達性障害、鬱病を抱えている場合も多いという。

そして、生活は昼と夜の逆転、無気力で何もやる気が起きずいらいらしている。身だしなみや部屋が乱れてくる。深夜コンビニくらいには買い物に行くことが出来る。引きこもっていることで自分を責めているなど、まるで息子の生活を覗いていたようにパネリストたちの話は続く。

親の心得としては、朝晩の挨拶から始め、話しかける時は声の調子や表情、動作や態度に注意する。また、どう対処していいのかわからず必要以上にかかわったり、逆にほったらかしにしてしまいがちだが、本人と距離を置くこと。悩んでばかりいないで自分をいたわること。自分の生活を楽しむことから始め、幸せを感じる経験や笑顔になる経験をしていく。家族が前向きに楽しそうにしていると、本人の気持の負担が軽くなり、生き方のヒントになったり、外へ出ることへの意欲を高めたりすることになる。なにより家族の笑顔で安心感が生まれるなど、反省させられるこ

とばかりが話されていた。
自分の接し方は間違っていた。不機嫌でいつもイライラしていた。芙紗子はこれまでの事を考えると心が痛んだ。
絶えず不安でしかたがなかったからニコニコなどしていられなかったのは事実なのだ。
これからは無理をしてでも笑顔でいなければ……。
最後に絶対に解決を急いではいけませんと締めくくられ、拍手に送られてパネリストたちは席を立った。
その後も、長時間のカウンセリングによって大勢の引きこもりやニートの人たちを自立に導いたという先生を紹介される機会を得て面会を申し込んだが、三ヶ月先まで予約が埋まっていた。東京都内だけでも約二万五千人いると推計されている実態を目の当たりにみたような気がした。
娘にそのことを言うと、
「お兄ちゃんがそんなカウンセリングに行くはずがないじゃない」と一蹴された。
「でも、必ず行くと何回も約束したのよ」
「行けばいいけど絶対に行かないと思うよ。その時は私が付いていくから」
三ヶ月後、娘の予想通り、張本人の息子が「風呂へ入っている時間がない」などと言い出して予約時間ぎりぎりになっても動こうとしないので、娘と孫との三人でそのオフィスを訪れるはめになってしまったのだ。
引きこもりやニートの自立に実績をあげているといわれているその先生は、開口一番、
「この時代、引きこもりやニートにならないほうがおかしいんだよなあ」と、ぼさぼさの髪の毛を掻き上げながら、フランクな口調で言われたことに、遠くでかすかに光る物を見つけたような気がした。
ここでも先日都庁で聞いた内容と同じようなことを言われたのだが、その間ひとりの中年女性が「先生、お陰様でやっと仕事をするようになりました」と、ドアの隙間から顔を出して、一言礼を言ってすぐに帰っていったのが心に残った。二時間あまりのカウンセリングの最後に
「いいですか、もう息子さんのことはかまわないで、自分の幸せのことだけを考えて生きて行くのですよ。親が幸せそうにしていたら息子さんの心が安定するのですから、いつかきっと自立しますよ。急いではいけませんよ」
「気がむいた時でいいですから一度息子さんにきてもらってください」と早口で締めくくって、先生は次の相談者を招き入れるよう事務員に伝えていた。
それ以来芙紗子はのんびり生きようと努めている。
そして出来るだけ楽しもうと思っている。
親が幸せそうにしていると子供の心が安定する……。
それを心にしっかりと焼きつけてこれからの人生を楽し

むつもりだ。
「不運は面白い。幸せは退屈だ」と、ある女性作家が書いていたが、それは人生を閉じる頃になって思えることであるということを最近感じるようになった。その渦中に身を投じている時は、とても面白いなどとは言っていられない。
たいして好きでもない男性と結婚をし、子供を産み育て、平凡な毎日を過ごす。もちろんその中にも必然的に大小の波が押し寄せてくることは避けられないが、なんだかつまらない。
芙紗子は卒業文集に「波乱万丈の人生を願っています」などと書き、友人たちにも口にすることをはばからなかった。あくびが出るような退屈で幸せな人生など少しも願っていなかったのだ。
友人たちは「芙紗子さんらしい生き方をしているわね。でもそれを望んでいたのでしょう」と言う。確かにその通りだが、現実は予想をはるかに超えて、しんどく大変なものであった。でも生を閉じる時、やはり面白かったと言えるような気がするし、それどころの状況じゃないような気もしている。
テレビを見ながら息子と向かい合って夕飯を食べる。
蓬髪と髭面の見慣れた形相の息子が黙々と箸を動かしている。
「今日の肉いやにかたいな」
「特売で買ったからやはりおいしくないね」
こんな生活に少しは遠慮しているのか、息子は一切食べ物には文句を言わずいつも残さず食べてくれる。二人はテレビを見ながら黙ってお互いの箸を動かしている。
画面にはお笑い番組が映っていた。
面白い場面に芙紗子は思わず大声で笑い出した。息子は笑いを押し殺したような歪んだ表情で、「なんだよう」と言った。
「だって面白いんだもん、面白いと思わない」
「あんたの喜怒哀楽の激しさにはついていけないよ。怒鳴ったり笑ったり気分で生きている人間だね。かってに笑ってろ」
食後、ソラナックスと加味逍遥散料を一包ずつ流し込む。息子のエリアでも薬を飲んでいる気配がしている。芙紗子は時々飲み忘れたり、薬の置き場所を探したりして、「あんたのずさんさにはあきれるよ」と、息子からひんしゅくを買っている。彼は朝、昼、晩、就寝時とピルケースに小さく分け決して飲み忘れることはしない。
親子で安定剤の服用は欠かせないが、芙紗子は勤めにも出ているし手抜きながらも家事もなんとかこなしている。しかし息子は十六年間殆ど仕事をしていないで引きこもっている。親が死んだら彼はどうなるのであろうか。

絶えず頭の中を占めている不安があるものの、今日も一日が終わろうとしている。

風呂に入る時、今日こそなんとか風呂に入ってほしいという思いから、

「湯を抜いておく？　そのままにしておく？」と聞くことにしているが、答えはいつも、

「抜いておいていいよ」

やはり今日も風呂へ入る気はないのだ。

ドライヤーで髪を乾かしながら隣室の気配に耳を傾ける。パソコンを打っている様子だ。

これから朝までが息子の一日の始まりなのだ。

深夜毎日のようにコンビニへ行っている様子が、朝見るカップラーメンの空カップや袋菓子やジュースの空き瓶などの散らかっていることでわかる。

芙紗子は睡眠導入剤を飲みベッドに入る。朝から夕方までの不安感と気だるさがうそみたいに頭が冴えているが、明日の勤めのために眠らないわけにはいかない。

電気を消し、頭から布団を被り暗闇の中で、唇だけで「おやすみなさい」と呟く。

息子のエリアからはカシャカシャというパソコンの音がかすかに聞こえている。

「まくた」31号より転載

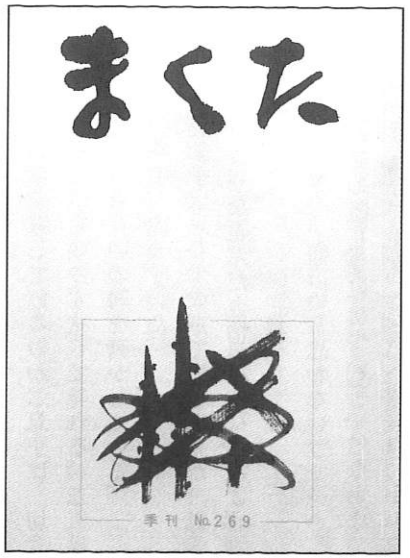
平井文子

ひらい　ふみこ

1942年生まれ　東京都北区在住

名古屋女子大　短期大学部卒業

同人誌「まくた」同人



まくた

「まくた」と私

平井文子

幼い頃からマンガを含めて本を読むことが好きだった私は、いつの頃からか、自分もこんな物語を書いてみたいと思うようになっていました。

五十歳を目前にしたある日、新宿の住友ビルの中に朝日カルチャーセンターというのがあり、その中に小説教室があることを知って、早速申し込みました。でも予約が詰まっていて、すぐには入会出来ませんでした。申し込んでから半年ほど過ぎた頃、空きが出来たという連絡があり、五十歳で初めて小説の書き方を学ぶ教室に入れたのです。

講師は駒田信二先生という中国文学の権威で、早稲田大学で教鞭を執っていらっしゃったという、崇高で近寄りがたい雰囲気を持たれた初老の紳士でした。

受講生は八十人くらい、年に四冊の「まくた」という同人誌を発行しており、二時間の講義で一作か二作の作品を、受講生の一人ずつが批評していくという、合評方式で授業が進められていきました。いろんな批評が飛び交い、授業は白熱して、あっという間に時間が過ぎていきます。

先生の批評は厳しく、泣き出す人もいるほどでした。

そこに在籍していた間、私は六編の小説を提出しましたが、一作を除き、後は先生からも受講生からも手厳しい批評を受け、自信をなくしていくばかりでした。しかし、とても勉強になったと思っています。

平成六年の暮、先生が急逝されたため、やはり有能な他の先生が授業を引き継いでくださいましたが、ちょうどその頃、私は一身上の都合で教室から去ることを余儀なくされたのです。その後の「まくた」については、紆余曲折を経て生徒たちだけで駒田先生の遺志を継ぎ「まくた」を存続させているということだけは耳に入っていました。

平成二十一年に私は十三年のブランクを経て現在の「まくた」に再入会しました。生徒数は三十名ほどになっていましたが、懐かしい顔ぶれが揃っていましたので、古巣へ辿り着けたような感慨がありました。もちろん教室は朝日カルチャーではなく、表参道にある青山荘というビルの一室を借りての合評会です。

現在も年に四冊の同人誌の発行と、月に二回二時間の合評というやりかたは以前と変わりありません。相変わらず合評は白熱しており、充実した時間を持つことが出来ます。

一年ほど前から、毎号ごとに文藝評論家の勝又浩先生に来ていただいて一冊分の批評を受けるようになりました。「まくた」は三十年以上もの歴史を持つ同人誌で、芥川賞をはじめ、大小、いろんな賞の受賞者を輩出しています。

皆、歳を重ねてしまいましたが、五十年は存続させたいねなどと、全員で話し合っている今日この頃です。